

FUJITSU Server PRIMEQUEST 1400S2 Lite

かんたん構築ガイド
(Linux/Oracle DB Standard Edition One 編)

はじめに

本書は、PRIMEQUEST 1000 シリーズの構築と導入を支援するガイドです。

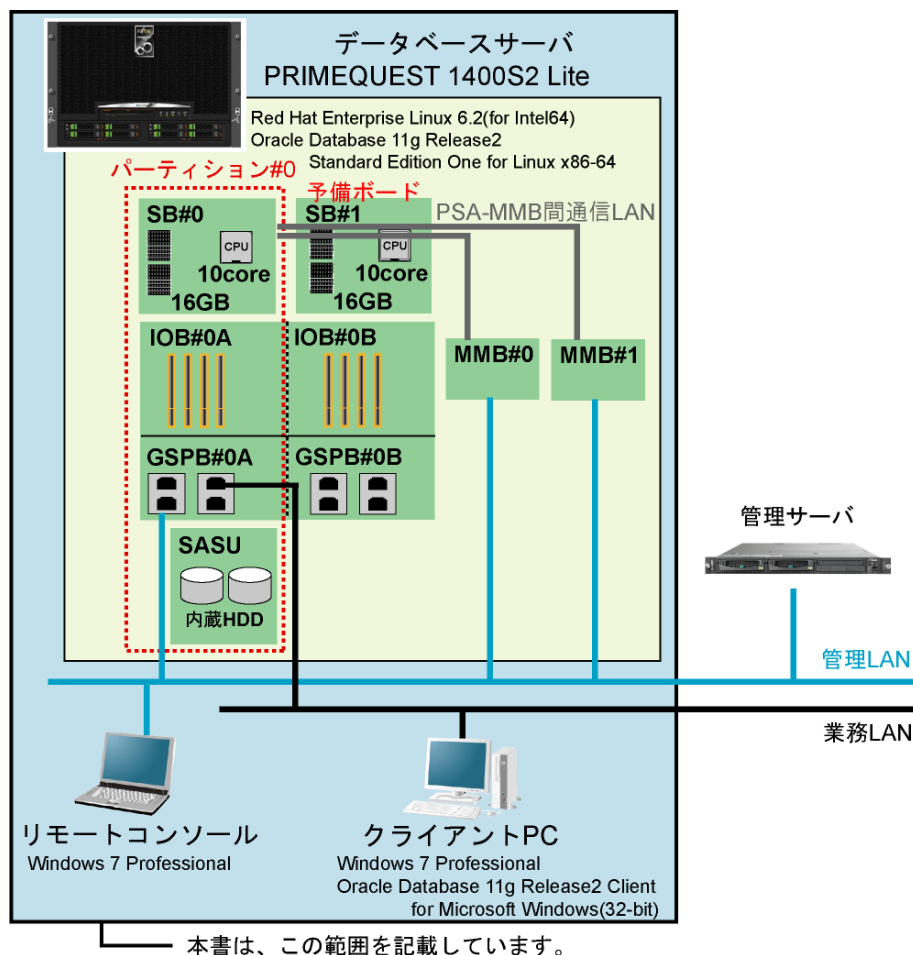
PRIMEQUEST 1400S2 Lite への OS のインストールと Oracle Database Standard Edition One のインストール、およびデータベース利用開始までの基本的な手順について記載しています。

システム構成

本書では、以下のシステム構成で構築した場合について記載しています。

可用性向上の手段として、Reserved SB（予備ボード）機能を採用した構成となっています。

Reserved SB 機能は、お客様の求める信頼性要件によっては、設計・構築・運用が比較的複雑で高コストとされているクラスタシステムからの代替手段としても有効です。



備考

本書は、PRIMEQUEST 1000 シリーズのエントリーモデルを利用したシンプルな構成によるデータベースサーバ構築をモデルとしています。そのため、システム領域、データ領域とも内蔵ディスク上に作成しています。
実際には、システムの性能、信頼性要件等を考慮して、SAN ストレージを導入することを推奨します。

項目		構成内容
本体モデル		PRIMEQUEST 1400S2 Lite
クラスタ		なし（シングル構成）
OS ブート		内蔵ディスク
メモリミラー		あり
パーティション 構成	SB	1 枚＋予備ボード （1SB あたり、CPU：10 コア（2.40GHz/30MB）×1 個、 メモリ：16GB（8GB（2GB DIMM×4）×2 セット））
	IO ユニット	1 セットの半分
	SAS アレイディ スクユニット	HDD×2 台 RAID レベル 1
OS		Red Hat® Enterprise Linux® 6.2 (for Intel64)
ミドルウェア	DB	サーバ： Oracle Database 11g Release2 Standard Edition One for Linux x86-64（Oracle Database Patch Set 11g Release 2 11.2.0.3 for Linux x86-64） クライアント： Oracle Database 11g Release2 Client for Microsoft Windows(32-bit)（Oracle Database Patch Set 11g Release 2 11.2.0.3 for Microsoft Windows (32-bit)）
	運用管理	ServerView Suite 10.12.05

略称

本書では、製品名を以下のように表記しています。

製品名	略称
PRIMEQUEST 1400S2 Lite	PRIMEQUEST 1000 シリーズ、 または PRIMEQUEST
ServerView Mission Critical Option	SVmco
Red Hat® Enterprise Linux® 6 (for Intel64)	Linux、RHEL6
Red Hat® Enterprise Linux® 6 (for x86)	
Oracle® Database 11g Release 2	Oracle Database
Oracle® Database 11g Release 2 Client	Oracle Database Client
ServerView Suite ServerView Installation Manager	SVIM
富士通 Linux サポートパッケージ	FJ-LSP
Database Configuration Assistant	DBCA

関連ドキュメント

システム構築を行う際に必要に応じて参照してください。

名称	略称
PRIMEQUEST 1000 シリーズ 導入マニュアル	導入マニュアル
PRIMEQUEST 1000 シリーズ 運用管理ツールリファレンス	運用管理ツールリファレンス
PRIMEQUEST 1000 シリーズ Linux ユーザーズマニュアル Red Hat Enterprise Linux 6 編	Linux ユーザーズマニュアル
PRIMERGY シリーズ PRIMEQUEST 1000 シリーズ Linux ユーザーズマニュアル Red Hat Enterprise Linux 6 編 (SupportDesk サービスご契約者様向け) (*1)	
ServerView Suite ServerView Installation Manager	—
PRIMEQUEST1000 シリーズ ServerView Mission Critical Option ユーザマニュアル	SVmco ユーザマニュアル
Red Hat Enterprise Linux 6 インストールガイド (*2)	—
Oracle® Database インストレーション・ガイド 11g リリース 2 (11.2) for Linux (*3)	インストレーションガイド
Oracle® Database リリース・ノート 11g リリース 2(11.2)for Linux (*3)	リリースノート
Oracle® Database Client インストレーション・ガイド 11g リリース 2 (11.2) for Microsoft Windows (*3)	Client インストレーションガイド
Oracle® Database Client クイック・インストレーション・ガイド 11g リリース 2(11.2)for Microsoft Windows(32-Bit) (*3)	Client クイックインストレーションガイド

(*1) 本書で特に断りが無い箇所は、『Linux ユーザーズマニュアル』に含まれます。

(*2) Red Hat 社のカスタマーポータル (<https://access.redhat.com/home>) から参照できます。

(*3) 日本オラクル社のマニュアルサイト

(<http://www.oracle.com/technetwork/jp/indexes/documentation/index.html>) から参照できます。

コマンド入力

本文中では、コマンド入力を以下のように表現しています。

- ▶ ユーザー可変（ユーザーの環境により異なる）の文字列

以下のように斜体で表記します。

```
# /sbin/e2label <device> <label>
```

- ▶ 追加／変更対象文字列

以下のように、太文字で表記します。

```
NETWORKING=yes  
HOSTNAME=xxxx  
:  
VLAN=yes
```

商標

- Linuxは、Linus Torvalds氏の米国およびその他の国における登録商標あるいは商標です。
- Red HatおよびRed Hatをベースとしたすべての商標とロゴは、Red Hat, Inc.の米国およびその他の国における登録商標あるいは商標です。
- OracleとJavaは、Oracle Corporationおよびその子会社、関連会社の米国およびその他の国における登録商標です。
- その他、会社名と製品名はそれぞれ各社の商標、または登録商標です。

目次

はじめに.....	1
1 インストール前の準備.....	7
1.1 ハードの初期設定.....	7
1.2 メディアの準備.....	8
1.2.1 RHELディストリビューションDVDイメージの準備.....	8
1.2.2 FJ-LSP CDイメージの準備（富士通SupportDeskサービス契約者のみ）.....	9
2 OSのインストール.....	10
3 OSインストール後の確認と設定.....	19
3.1 作業概要.....	19
3.2 確認と設定.....	20
3.2.1 インストール状態の確認.....	20
3.2.2 日付・時刻の確認.....	21
3.2.3 デバイス名変更防止の設定.....	21
3.2.4 ファイルシステムのオプション設定.....	21
3.2.5 ネットワークの設定.....	22
3.2.6 ソフトウェアのアップデート.....	27
3.2.7 ダンプ環境の設定.....	28
3.2.8 管理情報・構成情報の保存.....	28
3.2.9 セキュリティの設定.....	28
3.2.10 マウントポイントの作成.....	28
4 Oracle Databaseのインストール.....	29
4.1 インストール環境の設定.....	29
4.2 Oracle Databaseのインストールとデータベースの作成.....	30
4.2.1 インストールメディアの展開.....	30
4.2.2 cvu_configファイルの編集.....	31
4.2.3 Oracle Databaseのインストール.....	31
4.2.4 環境の設定.....	46
4.3 Oracle Database Clientのインストール.....	47
4.3.1 インストールメディアの展開.....	47
4.3.2 Oracle Database Clientのインストール.....	47
4.3.3 ローカル・ネット・サービス名の構成.....	51
5 データベースの利用開始.....	59

5.1	Oracle Enterprise Manager Database Controlへのログイン	59
5.2	ユーザー・アカウントの作成	60
5.3	SQL*Plusを使用したOracle Databaseへのアクセス	60
改版履歴		61
使用条件		62

1 インストール前の準備

PRIMEQUEST 1400S2 Lite に OS をインストールする前に必要な作業について説明します。

1.1 ハードの初期設定

『導入マニュアル』および『運用管理マニュアル』に従い、物理マシンを準備します。

主な作業と参照先を以下に示します。

項目	作業	参照先
MMB への接続と設定	ネットワーク設定 など	『導入マニュアル』の 「3.3 MMB への接続と設定」
パーティションの設定	パーティションの構成作成 など	『導入マニュアル』の 「3.4 パーティションの設定」
予備ボードの設定	MMB での Reserved SB 設定	■予備ボード (Reserved SB) の 設定方法
構成情報の保存	MMB 構成情報の保存	『導入マニュアル』の 「3.5 構成情報の保存」
Boot Watchdog の解除	MMB Web-UI の [ASR Control] メニューで Boot Watchdog を解除	『運用管理マニュアル』の「9.4.1 パーティションの自動再起動条 件の設定」

■ 予備ボード (Reserved SB) の設定方法

1. MMB Web-UI で、[Partition] - [Reserved SB Configuration] を選択します。
2. Reserved SB を設定するパーティションの行で、対象 SB のチェックボックスをオンにします。

#	Partition Name	Power Status	Mirror Mode (setting)	SB
0		Standby	Disable	☒ 0 ☐ 1
1		Standby	Disable	☐ 0 ☒ 1
Reserved				☒
Free				

図 1-1 Reserved SB 設定

3. [Apply] ボタンをクリックします。
4. [Partition Configuration] で対象 SB に [R] が付いていることを確認します。

1.2 メディアの準備

インストールに必要な以下のメディアを用意します。

メディア	用途	入手方法
ServerView Suite DVD 一式	OS のインストール設 定	PRIMEQUEST 本体に添付
RHEL6 のディストリビュー ション DVD	OS のインストール	「 1.2.1RHELディストリビューション DVDイメージの準備 」 を参照し、作成してください。
FJ-LSP CD イメージ (SupportDesk サービスを 契約されている場合)	添付ソフトや追加パ ッケージのインスト ール	1.2.2 の「 ■FJ-LSP CDイメージのダウン ロード 」を参照し、作成してください。
kernel-debuginfo CD イメージ		1.2.2 の「 ■kernel-debuginfo CDイメージ の作成 」を参照し、作成してください。
Oracle Database のインストール メディア一式	Oracle Database のインストール	別途購入

備 考

ServerView Suite の詳細は『製品概説』、FJ-LSP の詳細は『Linux ユーザーズマニユアル (SDK)』を参照してください。

1.2.1 RHELディストリビューションDVDイメージの準備

他のシステム上で、Red Hatのカスタマーポータル (<https://access.redhat.com>) からディストリビューションDVDのISOイメージファイルをダウンロードします。

注 意

- ▶ ダウンロードには、Red Hat Network (RHN) へのサブスクリプション登録が必要です。
- ▶ ディストリビューション DVD のイメージファイルは、マイナーリリースおよびアーキテクチャ(for x86/for Intel64)ごとに異なります。目的の DVD イメージファイルをダウンロードしてください。

1.2.2 FJ-LSP CDイメージの準備（富士通SupportDeskサービス契約者のみ）

■ FJ-LSP CD イメージのダウンロード

他のシステム上で、富士通SupportDesk UpdateSite Webサイト

（<https://eservice.fujitsu.com/updatesite/>）から、FJ-LSP CDのISOイメージファイルをダウンロードします。

注意

- ▶ ダウンロードには富士通との SupportDesk 契約が必要です。
- ▶ FJ-LSP CD のイメージファイルは、RHEL のマイナーリリースおよびアーキテクチャー(for x86/for Intel64)ごとに異なります。目的の CD イメージファイルをダウンロードしてください。

■ kernel-debuginfo CD イメージの作成

FJ-LSP イメージのダウンロードページから以下の 2 種類のパッケージをダウンロードし、ISO イメージファイルを作成します。

- ▶ kernel-debuginfo-common-＜アーキテクチャー＞-＜バージョン＞.el6.＜アーキテクチャー＞.rpm
- ▶ kernel-debuginfo-＜バージョン＞.el6.＜アーキテクチャー＞.rpm

注意

- ▶ ダウンロードには、Red Hat Network（RHN）へのサブスクリプション登録が必要です。
- ▶ パッケージファイルは、RHEL のマイナーリリースごとに異なります。目的の kernel-debuginfo パッケージをダウンロードしてください。

2 OSのインストール

SVIM のガイドモードを使用した、RHEL6 のインストールの手順について説明します。

本書では、ServerView Installation Manager 10.12.05 を使用してインストールしています。

1. パーティションをリモートストレージからブートする設定をします。

1. MMB Web-UI からビデオリダイレクションを起動します。

MMB Web-UI の詳細については、『運用管理ツールリファレンス』を参照してください。

注意

ビデオリダイレクションを使用するには、コンソール用 PC のブラウザで、Java が利用できる環境を整える必要があります。

2. [リモートストレージ] – [リモートストレージ...] で、「ServerView Suite DVD1」をセットしたドライブを追加します。

3. DVD ドライブの [接続] を選択します。

2. MMB Web-UI からパーティションの電源を投入します。

3. [Windows Boot Manager] 画面で、[ServerView Installation Manager (WinPE64)] を選択し、[Enter] キーを押します。

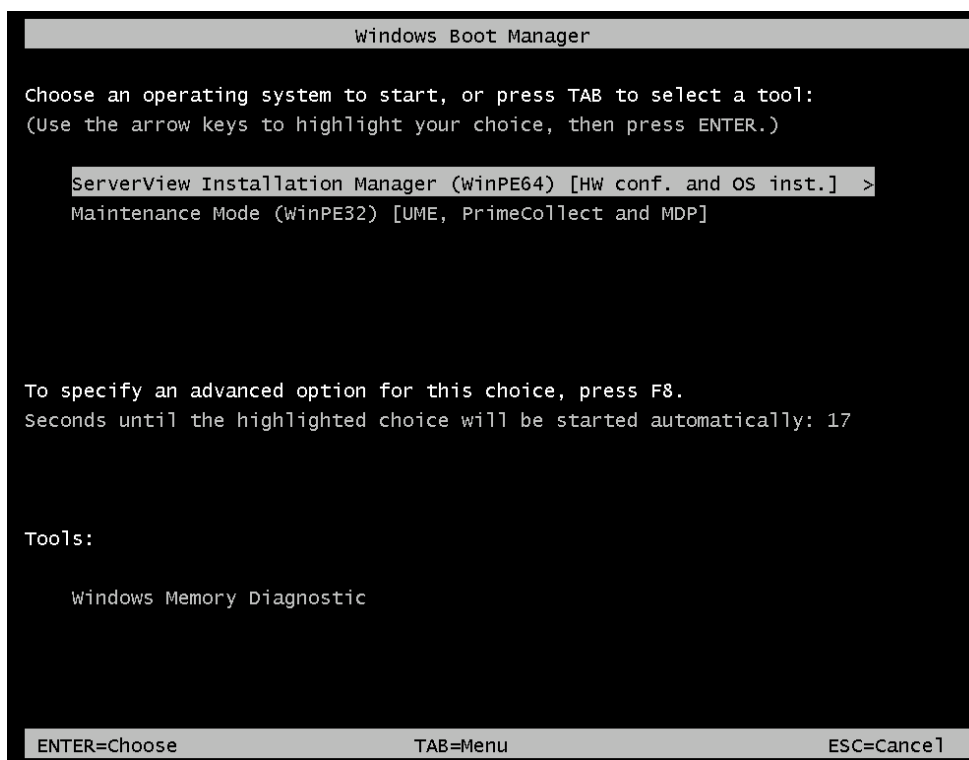


図 2-1 Windows Boot Manager

4. 言語選択画面で [Japanese] を選択します。

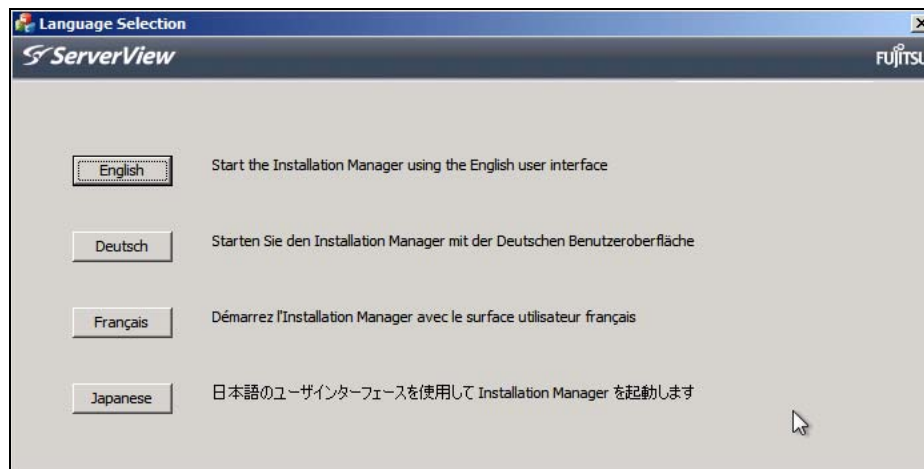


図 2-2 言語選択

5. 初期画面では何も設定せずに [次へ] をクリックします。
6. [ようこそ ServerView Installation Manager へ] 画面で、[Deployment] を選択します。

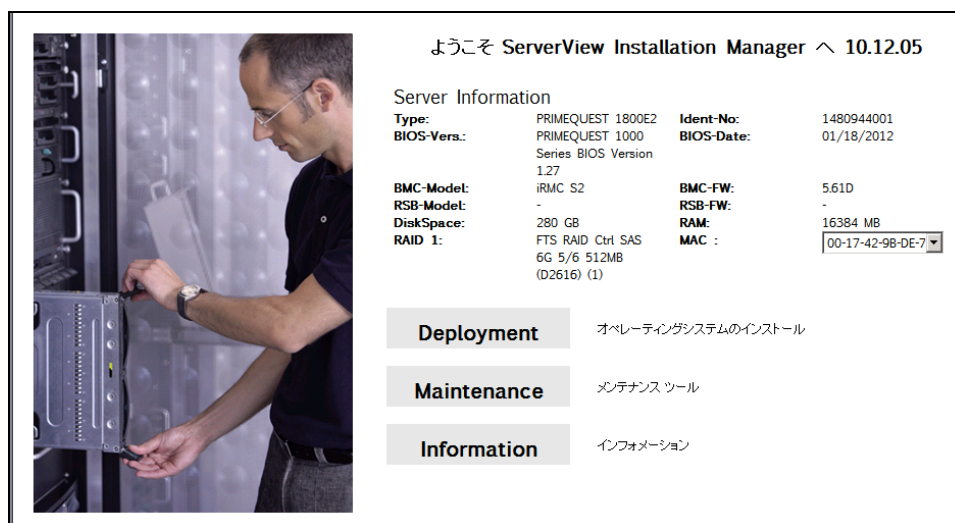


図 2-3 ようこそ ServerView Installation Manager へ

7. [Installation Manager Deployment Process Selection] 画面で、[ガイドモード] を選択し、
[次へ] をクリックします。

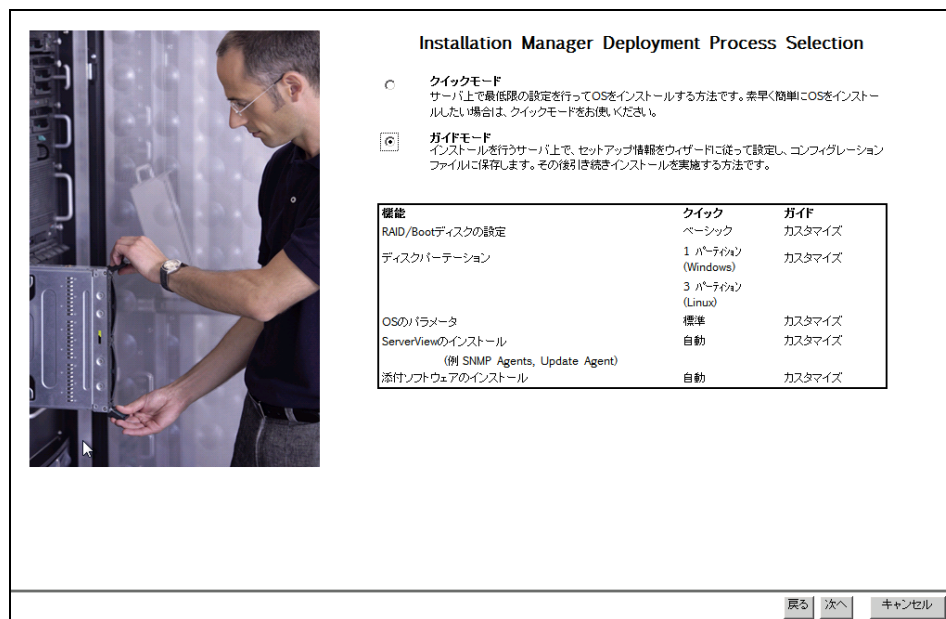


図 2-4 Installation Manager Deployment Process Selection

8. [オペレーティングシステムの選択] 画面で、OS を選択します。

1. 既存の構成を利用しない場合は、[新規にコンフィグレーションファイルを作成する。] を選択します。
2. OS の種別に [Linux]、ディストリビューションに [Red Hat Enterprise Linux] を選択し、使用するバージョンとマイナー番号を選択します。
3. [サーバ管理の設定を行う] のチェックを外します。
4. [次へ] をクリックします。

図 2-5 オペレーティングシステムの選択

9. [RAIDとディスクの構成] 画面で、必要なパーティションを作成し、[次へ] をクリックします。

- ▶ デフォルトで設定されている [/boot] と [/] の設定を変更します。

1. 各パーティション左の [+] をクリックします。
2. [ファイルシステムタイプ] を [ext3] に変更し、[適用] をクリックします。

- ▶ Oracle Database をインストールするパーティションを作成します。

1. [パーティションの追加] をクリックし、パーティション 4 を作成します。
2. マウントポイントに Oracle Database 用のフォルダ名 (画面例では [/ora]) を入力します。
3. [適用] をクリックします。

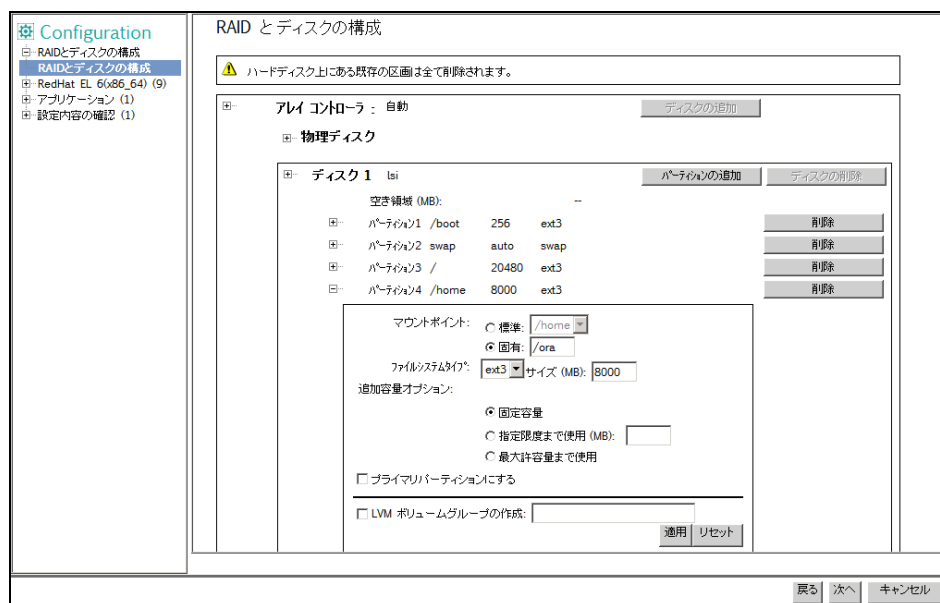


図 2-6 RAID とディスクの構成

10. [基本設定] 画面で、RHEL の基本設定をします。

1. [基本情報] の内容をリストより選択し、[システムクロックで UTC を使用] のチェックを外します。
2. [パスワード] に root パスワードを入力します。
3. [インストール設定] で、[インストール後、自動的にシステムを再起動] のチェックが外れていることを確認します。
4. [次へ] をクリックします。

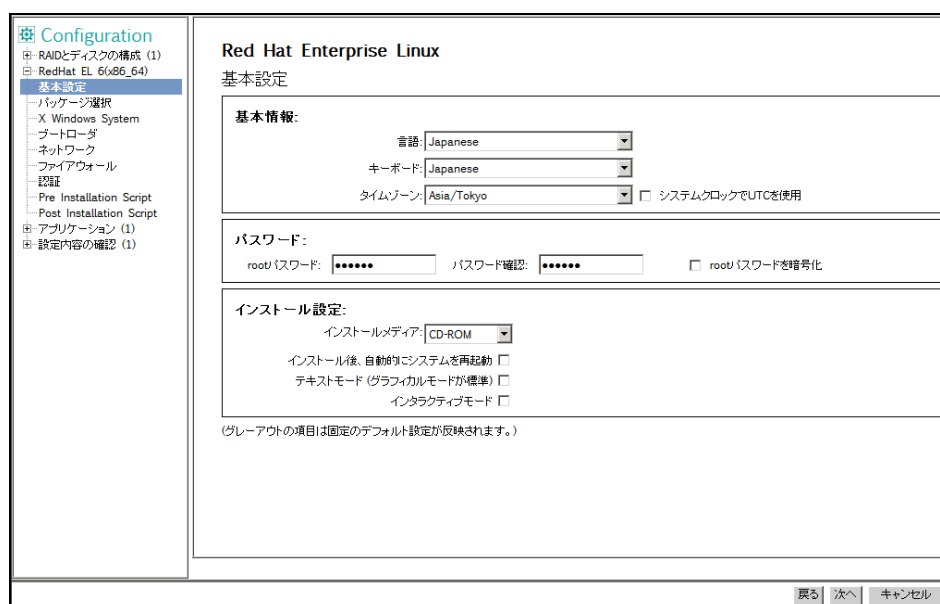


図 2-7 基本設定

11. [パッケージ選択] 画面で、インストールするパッケージを選択します。

1. [パッケージ選択の初期値] で、[デフォルトインストール] をクリックします。
2. [パッケージグループ] の [アプリケーション] で、[インターネットブラウザ] にチェックを入れます。
3. [個別パッケージ] に、Oracle Database の利用に必要な以下のパッケージを入力し、[追加] をクリックします。

- libaio-devel

4. [次へ] をクリックします。

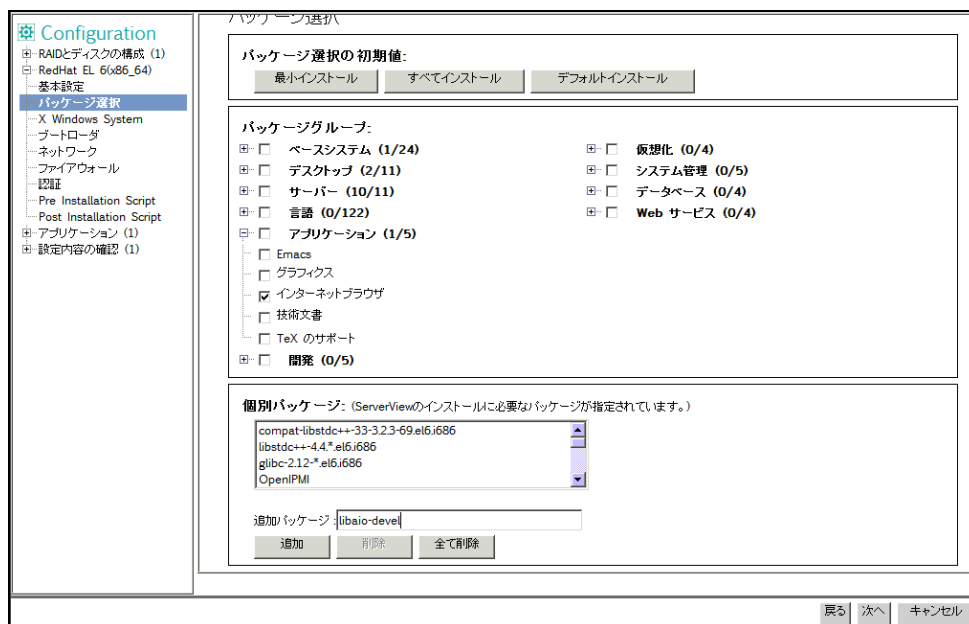


図 2-8 パッケージ選択

12. [X Windows System] 画面で、デフォルト値のまま [次へ] をクリックします。

13. [ブートローダ] 画面で、デフォルト値のまま [次へ] をクリックします。

14. [ネットワーク] 画面で、ネットワークの設定をします。

1. [ホスト名] にホスト名を入力します。
2. [DHCP で全てのネットワークデバイスを設定] のチェックを外します。
3. [次へ] をクリックします。

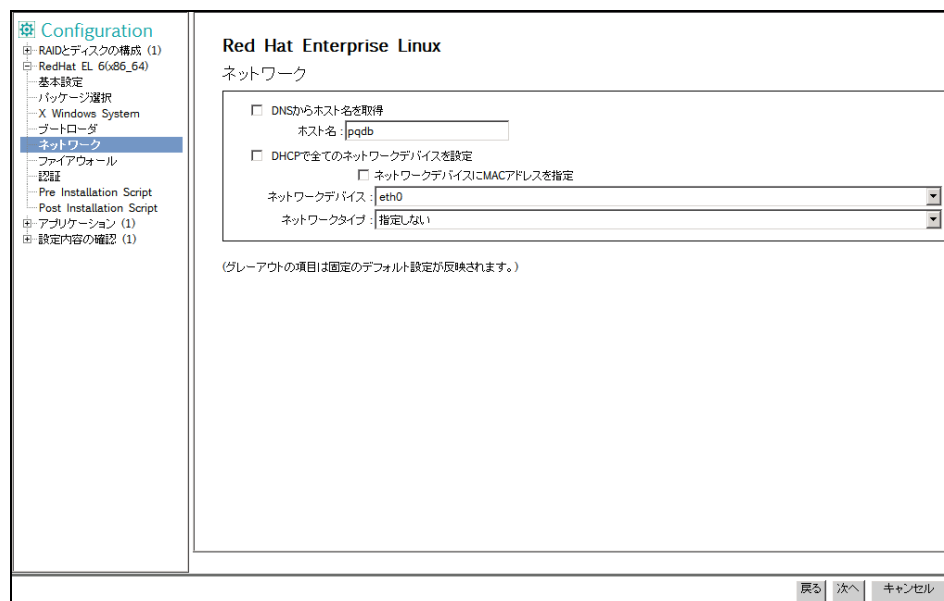


図 2-9 ネットワーク

15. [SELinux & ファイアウォール] の画面で、デフォルト値のまま [次へ] をクリックします。
16. [認証] 画面で、デフォルト値のまま [次へ] をクリックします。
17. [Pre Installation Script] 画面で、デフォルト値のまま [次へ] をクリックします。
18. [Post Installation Script] 画面で、デフォルト値のまま [次へ] をクリックします。
19. [アプリケーションウィザード] 画面で、デフォルト値のまま [次へ] をクリックします。
20. [設定内容の確認] 画面で、設定内容を確認し、[インストール開始] をクリックします。
自動インストールが開始されます。

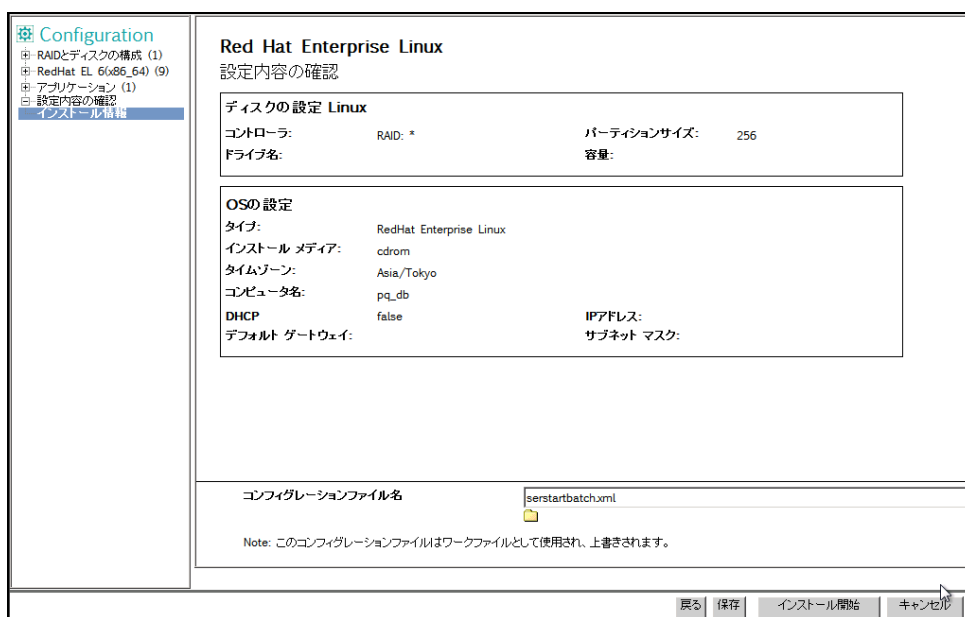


図 2-10 設定内容の確認

21. 以下のメッセージが表示されたら、ビデオリダイレクションの [リモートストレージ] で DVD ドライブを切断し、[OK] をクリックします。

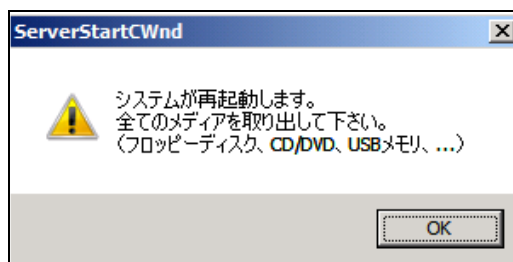


図 2-11 メディア取出しの確認

22. 再起動後に以下のメッセージが表示されたら、ビデオリダイレクションの [リモートストレージ] - [リモートストレージ...] で、RHEL6 の ISO イメージを追加、接続し、[Enter] キーを押します。

OS がインストールされます。

Please attach CDROM Device (usb-device, iRMC, Console Switch)

23. 以下の画面が表示されたら、ビデオリダイレクションの [リモートストレージ] で ISO イメージの接続を切断し、[再起動] をクリックします。



図 2-12 RHEL6 インストール完了画面

24. 再起動後に以下のメッセージが表示されたら、ビデオリダイレクションの [リモートストレージ] – [リモートストレージ...] で、FJ-LSP の ISO イメージを追加、接続し、[Enter] キーを押します。

```
Please insert Fujitsu Linux Support Packages (FJ-LSP) DVD. [any key]::
```

25. 下のメッセージが表示されたら、[y] キーを押して、[Enter] キーを押します。

```
os package for fujitsu middleware install ? [y/n]::y
```

26. 以下のメッセージが表示されたら、[y] キーを押して、[Enter] キーを押します。

FJ-LSP が適用された後、システムが自動的に再起動します。

```
enhanced-driver install ? [y/n]::y
```

27. 以下のメッセージが表示されたら、kernel-debuginfo の ISO イメージを追加、接続し、[Enter] キーを押します。

```
Please insert kernel-debuginfo disc(for kernel-<バージョン>.<アーキテクチャー>) [any key]::
```

28. 以下のメッセージが表示されたら、RHEL6 の ISO イメージを追加、接続し、[Enter] キーを押します。

```
Please insert Red Hat Enterprise Linux <OS バージョン>(<アーキテクチャー>) install disc [any key]::
```

必要なパッケージが適用された後システムが自動的に再起動するので、再起動が完了する前にビデオリダイレクションの [リモートストレージ] で ISO イメージを切断します。

備考

パッケージ適用後、ISO イメージの切断前に RHEL6 のインストールメディアから起動した場合は、ISO イメージを切断してから手動で再起動してください。

3 OSインストール後の確認と設定

3.1 作業概要

OS のインストール後に実施する作業と参照先を以下に示します。

設定項目	参照先
パッケージなどのインストール確認	3.2.1 インストール状態の確認
日付／時刻の確認	3.2.2 日付・時刻の確認
デバイス名の変更防止	3.2.3 デバイス名変更防止の設定
ファイルシステムのオプション設定	3.2.4 ファイルシステムのオプション設定
ネットワークの設定	3.2.5 ネットワークの設定
/etc/sysconfig/network の設定	
/etc/hosts の設定	
ネットワークデバイス名の確認	
NIC の設定	
NTP の設定	
管理 LAN 用 IP アドレスの設定	
ソフトウェアのアップデート	3.2.6 ソフトウェアのアップデート
ダンプ環境の設定	3.2.7 ダンプ環境の設定
管理情報・構成情報の保存	3.2.8 管理情報・構成情報の保存
セキュリティの設定	3.2.9 セキュリティの設定
マウントポイントの作成	3.2.10 マウントポイントの作成

備 考

Linux の設定に関する詳細は、『Linux ユーザーズガイド』を、管理 LAN など
PRIMEQUEST 固有の機能の詳細は、PRIMEQUEST 本体のマニュアル（『製品概説』
など）を参照してください。

3.2 確認と設定

3.2.1 インストール状態の確認

■ パッケージのインストール確認

RHEL にログイン後、install.log をチェックして、インストール時にエラーや警告が出力されていないか調べます。

備考

/root/install.log ファイルを参照すると、インストールの完全なログを確認できます。

```
# more /root/install.log
```

■ FJ-LSP の適用確認

1. 以下のコマンドを入力して、FJ-LSP 適用の実行ログファイルを開きます。

```
# less /var/log/fj_lsp/log/fj-lsp-exec-<FJ-LSP 適用処理の開始時間>.log
```

2. ファイルの最後に以下のメッセージが表示されていることを確認します。

<PID> には数字が入ります。

```
## information : the application ended normally.  
                : /tmp/fj_lsp_tmp.<PID> is no more needed, please delete it.
```

備考

メッセージが表示されていない場合は、『Linux ユーザーズマニュアル』を参照し、エラーメッセージに従った対処をしてください。

3. /tmp/fj_lsp_tmp.<PID> を削除します。

```
# rm -rf /tmp/fj_lsp_tmp.<PID>
```

3.2.2 日付・時刻の確認

システムの日付と時刻を設定します。

注意

設定した時刻をハードウェアに反映するため、設定後にシステムの再起動が必要です。

以下に、date コマンドを利用したシステムの日付と時刻の確認／設定方法を説明します。

1. システムの日付と時刻の設定を確認します。

```
# date
2012 年 11 月 22 日 木曜日 14 :45 :00 JST
```

日本語が表示できない場合は、以下のように LANG の設定を変更して確認します。

```
# LANG=C date
Thu Nov 22 14 :45 :00 JST 2012
```

システムの日時が正しくない場合、以下の手順で日時を変更します。

2. システムの日時が正しくない場合、以下の手順で時刻の設定を変更します。

1. シングルユーザーモードに移行して、現在の時刻を設定します。

(例) システムの時刻を「2012 年 11 月 23 日 14 時 47 分」に設定する場合

```
# cd /
# shutdown now
...
# LANG=C date 112314472012
Fri Nov 23 14 :47 :00 JST 2012
```

2. システムを再起動します。

```
# shutdown -r now
```

3. 再起動後、システムにログインして、日時が正しく設定されているか確認します。

```
# LANG=C date
Fri Nov 23 <現在の時刻> JST 2012
```

3.2.3 デバイス名変更防止の設定

『Linux ユーザーズマニュアル』を参照し、デバイス名ずれ防止の設定を行ってください。

3.2.4 ファイルシステムのオプション設定

/etc/fstab ファイルで、必要なファイルシステムのオプションを指定してください。

設定方法の詳細は、『Linux ユーザーズマニュアル』を参照してください。

3.2.5 ネットワークの設定

■ /etc/sysconfig/network の設定

/etc/sysconfig/network ファイルを設定します。

```
# vi /etc/sysconfig/network
NETWORKING=yes
NETWORKING_IPV6=no
HOSTNAME=＜ホスト名＞
DHCP_HOSTNAME="$HOSTNAME"
GATEWAY=＜デフォルトゲートウェイアドレス＞
```

■ /etc/hosts の設定

/etc/hosts に自ホストの IP アドレスを記入します。

```
# vi /etc/hosts
127.0.0.1 localhost localhost.localdomain localhost4
localhost4.localdomain4
::1 localhost localhost.localdomain localhost6 localhost6.localdomain6
＜IP アドレス＞   ＜自ホスト名＞           ←追加する
...
```

備考

自ホストの以外のホストの設定を行う場合は、行を追加して IP アドレスとホスト名を記載してください。

■ ネットワークデバイス名の確認

ネットワークデバイスは、システムのインストール時に検出された順番に名前が付けられます(eth0、eth1 …ethX)。それぞれのネットワークデバイス名が本体装置のどの LAN ポートに割り当てられたかを確認します。

システムに認識されている全ネットワークデバイス名を、ifconfig コマンドで確認します。

```
# /sbin/ifconfig -a

(例)
# /sbin/ifconfig -a
eth0  Link encap:Ethernet HWaddr xx:xx:xx:xx:xx:xx
      inet6 addr: xxxx::xxx:xxxx:xxxx:xxxx/xx Scope:Link
      UP BROADCAST RUNNING MULTICAST  MTU:1500 Metric:1
      RX packet:1107704  errors:0 dropped:0 overruns:0 frame:0
      TX packets:2653820 errors:0 dropped:0 overruns:0 carrier:0
      collisions:0 txqueuelen:1000
      RX bytes:39009908 (371.9 MiB)  TX bytes:809006934 (771.5 MiB)
      Memory:xxxxxxxx-xxxxxxxx

eth1  Link encap:Ethernet HWaddr xx:xx:xx:xx:xx:xx
      inet6 addr: xxxx::xxx:xxxx:xxxx:xxxx/xx Scope:Link
      UP BROADCAST RUNNING MULTICAST  MTU:1500 Metric:1
      RX packet:1107704  errors:0 dropped:0 overruns:0 frame:0
      TX packets:2653820 errors:0 dropped:0 overruns:0 carrier:0
      collisions:0 txqueuelen:1000
      RX bytes:39009908 (371.9 MiB)  TX bytes:809006934 (771.5 MiB)
      Memory:xxxxxxxx-xxxxxxxx

...

lo    Link encap:Local Loopback
      inet addr:127.0.0.1 Mask:255.0.0.0
      inet6 addr: ::1/128 Scope:Host
      UP LOOPBACK RUNNING  MTU:16436  Metric:1
      RX packets:3865 errors:0 dropped:0 overruns:0 frame:0
```

備考

ネットワークデバイス名を確認したら、「/sbin/ethtool -i ethX」コマンド(ethX は確認したネットワークデバイス名)で、以下の確認をしてください。

- PSA-MMB 間通信 LAN 用のポート番号を確認してください。
詳細は、『SVmco ユーザマニュアル』を参照してください。
- 使用する NIC のネットワークデバイス名と一致する物理ポートの MAC アドレスを確認してください。

■ NIC の設定

1. 使用する NIC に対してネットワークアドレス、ブロードキャストアドレスなどを設定します。

カード障害時に NIC のデバイス名が変わらないようにするために、"HWADDR= <MAC アドレス>"の定義は残します。

```
# vi /etc/sysconfig/network-scripts/ifcfg-ethX
DEVICE="ethX"
BOOTPROTO="static"
DHCP_HOSTNAME=" <ホスト名>"
HWADDR= <MAC アドレス>    ←そのまま
IPV6INIT="yes"
# Modified by FJ-LSP yyyy/mm/dd-hh:mm:ss
#NM_CONTROLLED="yes"
NM_CONTROLLED="no"
ONBOOT=" <OS 起動時の設定>"
IPADDR=" <IP アドレス>"
NETMASK=" <サブネットマスク>"
NETWORK=" <ネットワークアドレス>"
BROADCAST=" <ブロードキャストアドレス>"
```

備考

- [BOOTPROTO] は [static] にしてください。
- [ONBOOT] は使用する NIC を [yes] にし、使用しない NIC は [no] にしてください。

2. ネットワークを再起動し、設定を適用します。

```
# service network restart
```

■ NTP の設定

NTP クライアント機能を設定します。

1. ntp.conf ファイルに NTP の問い合わせ先として利用する、上位サーバの IP アドレスを記載します。
安定した NTP 運用を行うためには、信頼できる NTP サーバを 3 台以上設定してください。

```
# vi /etc/ntp.conf
server <NTP サーバの IP アドレス-1>
server <NTP サーバの IP アドレス-2>
server <NTP サーバの IP アドレス-3>
```

備考

MMB が NTP 運用による時刻補正を行っている場合は、MMB とパーティションの時刻の差を小さくするために、MMB が指定する NTP サーバを各パーティションでも指定してください。

2. step-tickers ファイルにも、NTP サーバの IP アドレスを設定します。

```
# vi /etc/ntp/step-tickers
# List of servers used for initial synchronization.
<NTP サーバの IP アドレス-1>
<NTP サーバの IP アドレス-2>
<NTP サーバの IP アドレス-3>
```

3. NTP サービスを slew モードに設定します。

ntpd ファイルに ntpd 起動オプションの“-x”を追加します。

```
# vi /etc/sysconfig/ntpd

(変更前)
# Drop root to id 'ntp:ntp' by default.
OPTIONS="-u ntp:ntp -p /var/run/ntpd.pid -g"

(変更後)
# Drop root to id 'ntp:ntp' by default.
OPTIONS="-x -u ntp:ntp -p /var/run/ntpd.pid -g"
```

4. NTP の運用を開始します。

1. ntpdate の自動起動を設定し、サービスを開始します。

```
# chkconfig ntpdate on
# service ntpdate start

(表示例)
ntpdate: 時間サーバと同期中: [ OK ]
```

2. ntpd の自動起動を設定し、サービスを開始します。

```
# chkconfig ntpd on
# service ntpd start
(表示例)
ntpd を起動中: [ OK ]
```

5. ntpdate サービスがランレベル 2～5 で有効になっていることを確認します。

```
# chkconfig --list ntpdate
(表示例)
ntpd    0:off 1:off 2:on 3:on 4:on 5:on 6:off
```

6. ntpd が動作していること、ランレベル 2～5 で有効になっていることを確認します。

```
# service ntpd status
(表示例)
ntpd (pid xxx)を実行中...
# chkconfig --list ntpd
(表示例)
ntpd    0:off 1:off 2:on 3:on 4:on 5:on 6:off
```

7. パーティション上で ntptrace (1M) か ntpq (1M) を使用して NTP の動作確認をします。

NTP サーバとクライアントの同期が確立するまでには 5 分以上が必要です。

時刻同期が確立している場合は、NTP サーバのホスト名または IP アドレスの左側に[*]が表示されます。

```
# /usr/sbin/ntpq -p
(表示例)
remote  refid  st t when poll reach delay offset jitter
* <NTP の参照先> LOCAL(0) 6u 42 64 377 0.56 -1.328 0.14
```

■ 管理 LAN 用 IP アドレスの設定

パーティション上の管理 LAN の IP アドレスを設定します。

以下の手順で SVmco にパーティション上の管理 LAN の IP アドレスを設定します。

1. eecd プロセスが起動していることを確認します。

eecd プロセスが起動していない場合は手順 2 に、起動している場合は、手順 3 に進みます。

```
# ps ax | grep eecd

(eecd プロセスが起動している場合の結果表示)
xxxx ?      Ssl  xx:xx /usr/sbin/eecd
xxxx xxxx  S+   00:00 grep eecd

(eecd プロセスが起動していない場合の結果表示)
xxxx xxxx  S+   00:00 grep eecd
```

2. eecd プロセスが起動していない場合は、以下を入力して ServerView エージェントを起動します。

```
# /usr/sbin/srvmagt start
```

3. /etc/fujitsu/SVmco/usr/ipsetup.conf ファイルを編集します。

```
# vi /etc/fujitsu/SVmco/usr/ipsetup.conf

[NETWORK]
ManagementIP=<管理 LAN 用 IP アドレス>
```

4. eecddcp コマンドを実行し、ServerView エージェントに反映します。

特定の数字が出力されます。

```
# /usr/sbin/eecddcp -c oc=E002 oe=000C \'<管理 LAN 用 IP アドレス>\'
XX XX XX XX XX XX XX XX XX XX XX XX XX XX
```

5. SVmco を再起動します。

```
# /sbin/service y30SVmco stop
# /sbin/service y30SVmco start
```

3.2.6 ソフトウェアのアップデート

新しい版数のドライバ、ツールが公開されている場合は、ソフトウェアのアップデートをしてください。

各ソフトウェアのアップデート手順については、富士通SupportDesk契約者向けWebページ（富士通SupportDesk:<http://eservice.fujitsu.com/supportdesk/>）を参照してください。

3.2.7 ダンプ環境の設定

ダンプ環境の設定については、以下を参照してください。

- ▶ kdump

『Linux ユーザーズマニュアル (SDK) 』を参照してください。

- ▶ sadump

『導入マニュアル』の「6.5 sadump の設定」を参照してください。

3.2.8 管理情報・構成情報の保存

管理情報・構成情報の保存については、『導入マニュアル』の「6.9 管理情報・構成情報の保存」を参照してください。

3.2.9 セキュリティの設定

セキュリティの設定については、以下を参照してください。

- ▶ MMB 上の設定

『導入マニュアル』の「7.5 セキュリティの設定」

- ▶ OS 上の設定

セキュリティ設定全般：『Red Hat Enterprise Linux 導入ガイド』

修正適応：『Linux ユーザーズマニュアル (SDK) 』

3.2.10 マウントポイントの作成

CD-ROM および DVD-ROM をマウントし操作を行うための準備作業として、マウントポイントを作成します。ここではマウントポイントのディレクトリを [/media/cdrom] としています。

```
# mkdir /media/cdrom
# chmod 777 /media/cdrom
```

4 Oracle Databaseのインストール

4.1 インストール環境の設定

システムへ root としてログインし、以下の設定をします。

■ オペレーティングシステムグループとユーザーの作成

1. oracle インベントリ・グループ (oinstall) および OSDBA グループ (dba) を作成します。

```
# /usr/sbin/groupadd oinstall
# /usr/sbin/groupadd dba
```

2. oracle ユーザーを作成します。

```
# /usr/sbin/useradd -g oinstall -G dba oracle
```

このコマンドにより、oracle ユーザー (oracle) が作成され、oinstall がプライマリ・グループとして、dba がセカンダリ・グループとして指定されます。

3. oracle ユーザーのパスワードを設定します。

```
# passwd oracle
```

■ ディレクトリの作成

oracle ベース・ディレクトリを作成します。

OS インストール時に Oracle Database 用に作成したディレクトリにサブディレクトリを作成し、適切な所有者、グループおよびそれらの権限を設定します。

```
# mkdir -p /<Oracle Database 用ディレクトリ名>/app/
# chown -R oracle:oinstall /<Oracle Database 用ディレクトリ名>/app/
# chmod -R 775 /<Oracle Database 用ディレクトリ名>/app/
```

■ oracle ユーザーのシェル起動ファイルの修正

1. ユーザーを [oracle] に切り替えます。

```
# su - oracle
```

2. oracle ユーザーのシェル起動ファイルを開きます。

```
$ vi .bash_profile
```

3. 以下の行を入力し、デフォルトのファイル・モード作成マスクに値 [022] を指定します。

```
umask 022
```

4. ファイルを保存します。

4.2 Oracle Databaseのインストールとデータベースの作成

本書では、Oracle Database Patch Set 11g Release 2 11.2.0.3 for Linux x86-64 を使用してインストールしています。

注意

本手順のインストールでは、インストール中およびインストール後の Oracle 関連の GUI 画面が英語環境で表示されます。

4.2.1 インストールメディアの展開

Oracle Database のインストールメディアを、RHEL 6 上に展開します。

1. [リモートストレージ] – [リモートストレージ...] で、Oracle Database のインストールメディア (Oracle Database Patch Set 11g Release 2 11.2.0.3 for Linux x86-64 (Disk 1 of 2)または(Disk 2 of 2)) を接続します。

2. root 権限で以下のコマンドを入力し、メディアをマウントします。

```
# mount -t iso9660 /dev/cdrom /media/cdrom
```

注意

自動でマウントされた場合は、一度アンマウントしてから上記コマンドを入力し、メディアをマウントしてください。

3. 以下のコマンドで、メディア内の必要な zip ファイルを oracle ユーザーが利用できる場所 (/tmp など) に展開します。

```
# unzip /media/cdrom/<zip ファイル名> -d <展開先ディレクトリ>
```

PatchSetNotes.htm を参照して必要な zip ファイルを展開してください。

Oracle Database のインストールに最低限必要なファイルは「Oracle Database Patch Set 11g Release 2 11.2.0.3 for Linux x86-64 (Disk 1 of 2)」内の以下になります。

- p10404530_112030_Linux-x86-64_1of7.zip
- p10404530_112030_Linux-x86-64_2of7.zip

4. 展開が終了したら、メディアをアンマウントします。

```
# umount -t iso9660 /media/cdrom
```

5. [リモートストレージ] で ISO イメージを切断します。

備考

「Oracle Database Patch Set 11g Release 2 11.2.0.3 for Linux x86-64」は「Disk 1 of 2」と「Disk 2 of 2」の 2 枚に分かれています。
必要なメディア数と zip ファイルの数に応じて上記手順を繰り返してください。

4.2.2 cvu_config ファイルの編集

RHEL6 に Oracle Database Patch Set 11g Release 2 11.2.0.3 for Linux x86-64 をインストールするため、インストールメディアを展開したディレクトリ内の cvu_config ファイルを編集します。

1. 以下のコマンドを入力し、インストールメディアを展開したディレクトリ内の cvu_config ファイルを開きます。

```
# vi <展開ディレクトリ>/database/stage/cvu/cv/admin/cvu_config
```

2. 以下の編集をします。

```
(修正前)
CV_ASSUME_DISTID=OEL4

(修正後)
CV_ASSUME_DISTID=OEL6
```

4.2.3 Oracle Databaseのインストール

Oracle Universal Installer を起動して、Oracle Database をインストールします。

1. oracle 以外のユーザーでログインしている場合は、X Window System から oracle ユーザーでログインします。

注意

必ず X Window System から、oracle ユーザーでログインしてください。root などから端末だけ oracle ユーザーにログインした場合、インストーラを起動できません。

2. ORACLE_BASE および ORACLE_SID 環境変数を設定します。orcl はデータベースの呼び名 (通常は 5 文字以内) です。

```
$ ORACLE_BASE=/<Oracle Database 用ディレクトリ名>/app/oracle
$ ORACLE_SID=orcl
$ LANG=C
$ export ORACLE_BASE ORACLE_SID LANG
```


3. TNS_ADMIN 環境変数を削除します。

```
$ unset TNS_ADMIN
```

4. 以下のコマンドを入力し、インストールメディアを展開したディレクトリ内の Oracle Universal Installer を起動します。

```
$ <展開ディレクトリ>/runInstaller
```

5. [Configure Security Updates] 画面で、以下の設定をします。

▶ My Oracle Support のアカウントをお持ちの場合

以下の設定をすることで未適用のパッチの案内と適用が可能になります。

1. [Email] に登録したメールアドレス、[My Oracle Support Password] にパスワードを入力します。
2. [Next] をクリックします。

▶ My Oracle Support のアカウントをお持ちでない場合

1. [I wish to receive security updates via My Oracle Support.] のチェックを外します。
2. [Next] をクリックします。
3. [You have not provided an email address.] メッセージ画面で [Yes] をクリックします。

備考

Oracle Enterprise Manager と My Oracle Support の連携による以下の機能は、富士通 Supportdesk では提供していません。

- お客様インスタンスの稼動状態の遠隔監視機能。
- お客様インスタンスのトラブル情報の遠隔採取機能。

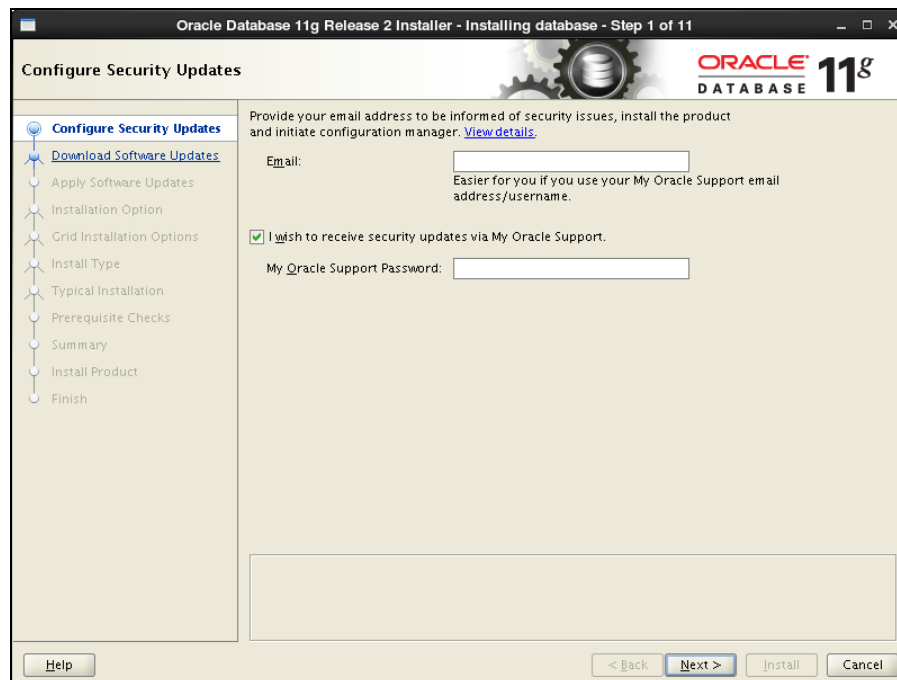


図 4-1 Configure Security Updates

6. [Download Software Updates] 画面で、[Skip software updates] を選択し、[Next] をクリックします。

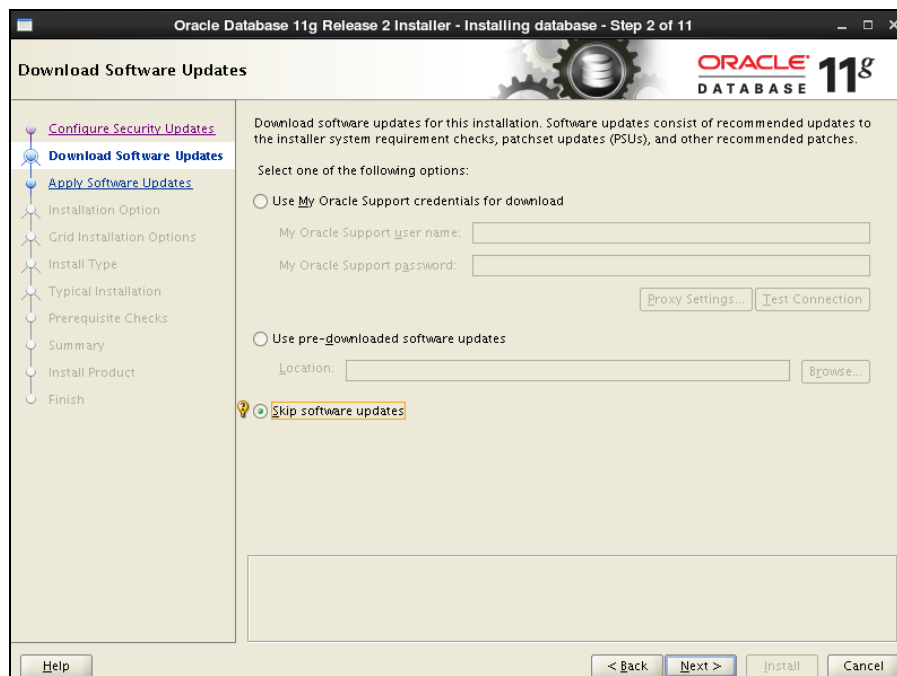


図 4-2 Download Software Updates

備考

My Oracle Support をお持ちの場合、[Skip software updates] 以外を選択することによりアップデートモジュールをインストールできます。
画面の指示に従ってインストールを進めてください。

- [Use My Oracle Support credentials for download] を選択した場合
[My Oracle Support user name] にユーザー名、[My Oracle Support password] にパスワードを入力し、[Next] をクリックします。
- [Use pre-downloaded software updates] を選択した場合
[Location] にあらかじめダウンロードしたアップデートモジュールの場所を指定し、[Next] をクリックします。

7. [Select Installation Option] 画面で、[Create and configure a database] を選択し、[Next] をクリックします。

備考

本オプション選択時に作成されるデータベースは「汎用」データベースとなります。
本書では、比較的小規模なデータベースを想定していますが、大規模なデータベースの場合や、開発用途以外のデータベースの場合は、以下の手順でデータベースを作成してください。

1. 本画面で [Install database software only] を選択してインストール
2. インストール完了後に、DBCA を実行してカスタムデータベースを作成

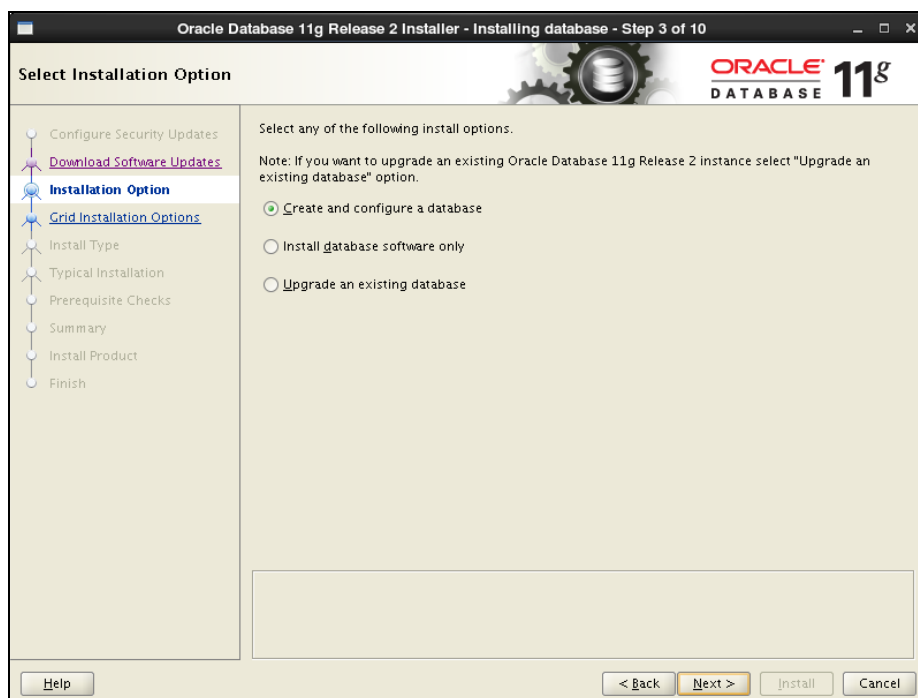


図 4-3 Select Installation Option

8. [System Class] 画面で、[Server Class] を選択し、[Next] をクリックします。

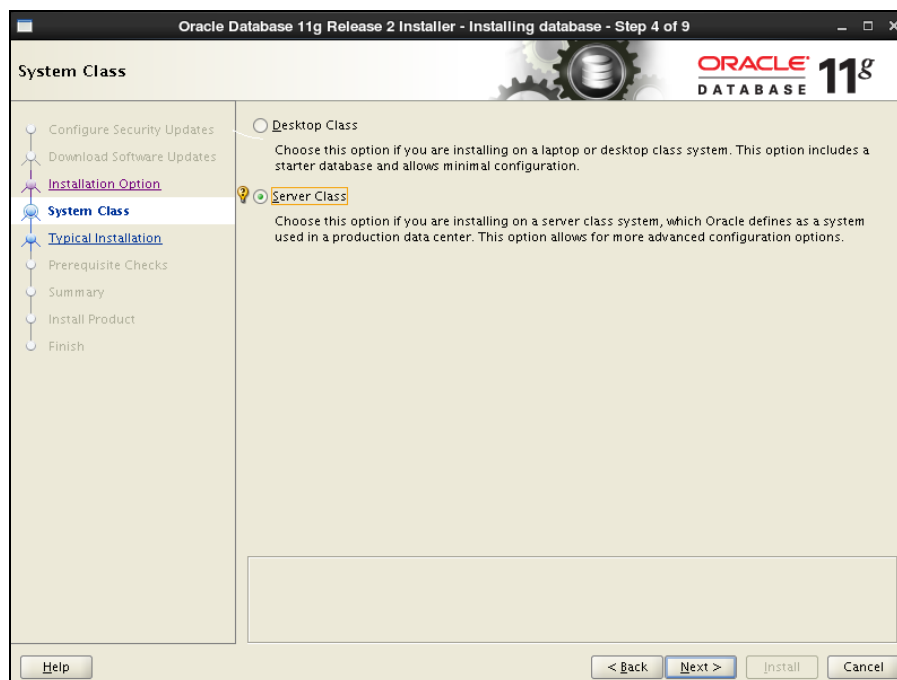


図 4-4 System Class

9. [Grid Installation Options] 画面で、[Single instance database installation] を選択し、[Next] をクリックします。

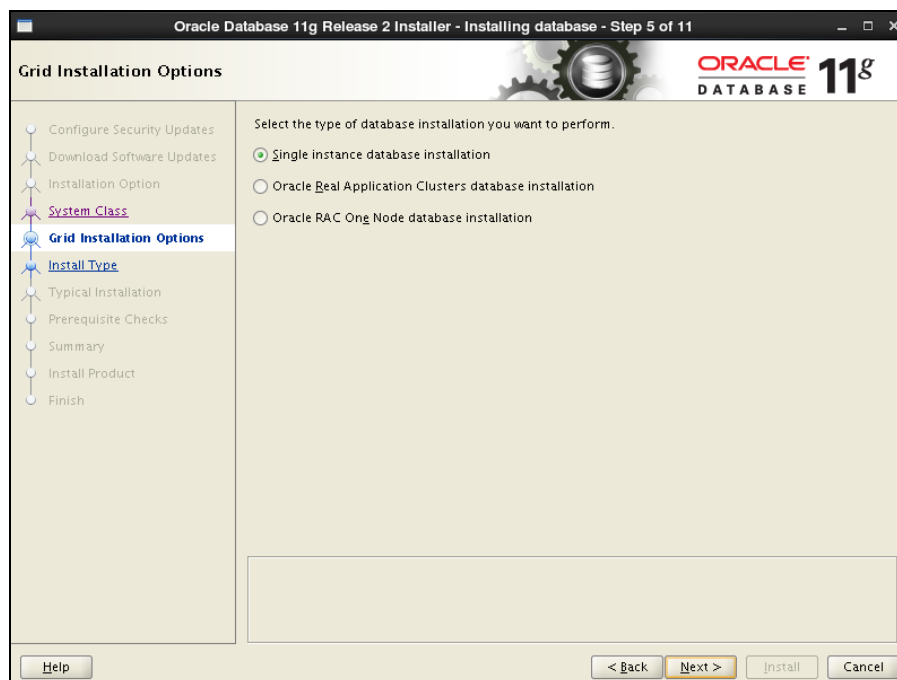


図 4-5 Grid Installation Options

10. [Select Install Type] 画面で、[Advanced install] を選択し、[Next] をクリックします。

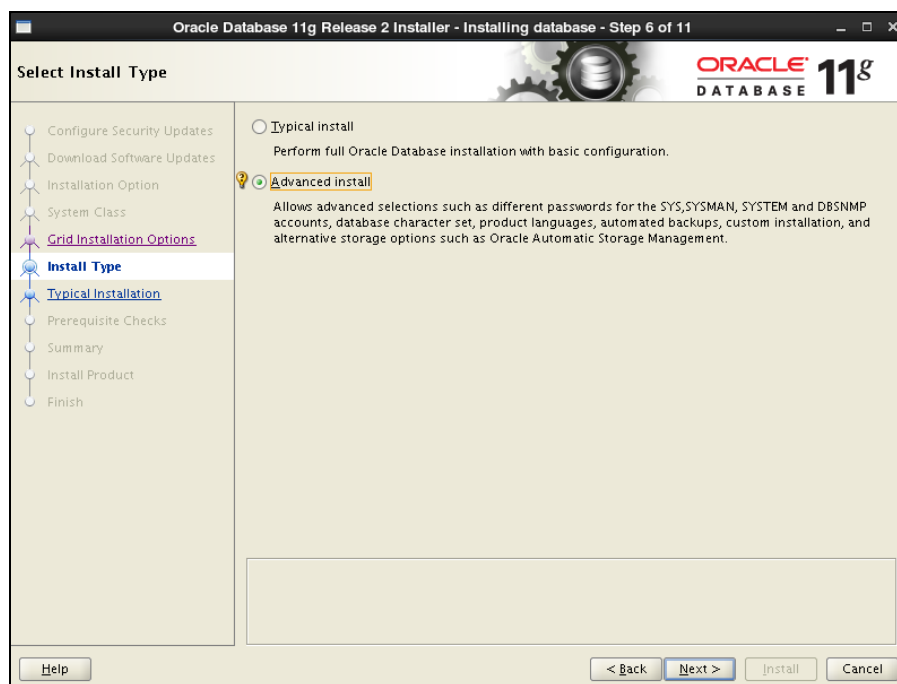


図 4-6 Select Install Type

11. [Select Product Languages] 画面で、言語の設定をします。
1. [Available Languages] 欄で [Japanese] を選択し、[>] をクリックします。
[Selected Languages] 欄に [Japanese] が移動したことを確認します。
 2. [Next] をクリックします。

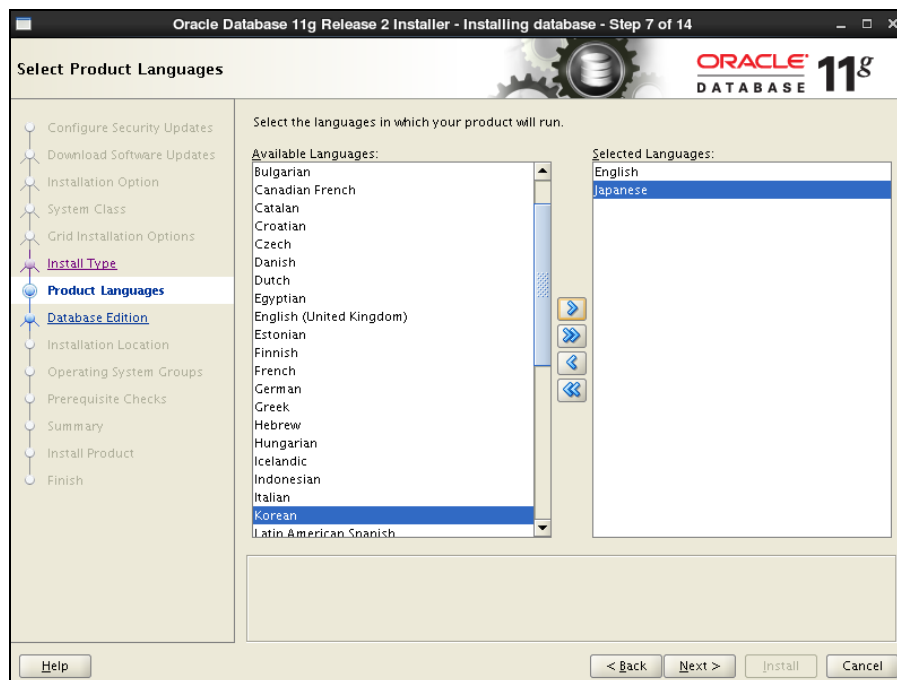


図 4-7 Select Product Languages

12. [Select Database Edition] 画面で、[Standard Edition One] を選択し、[Next] をクリックします。

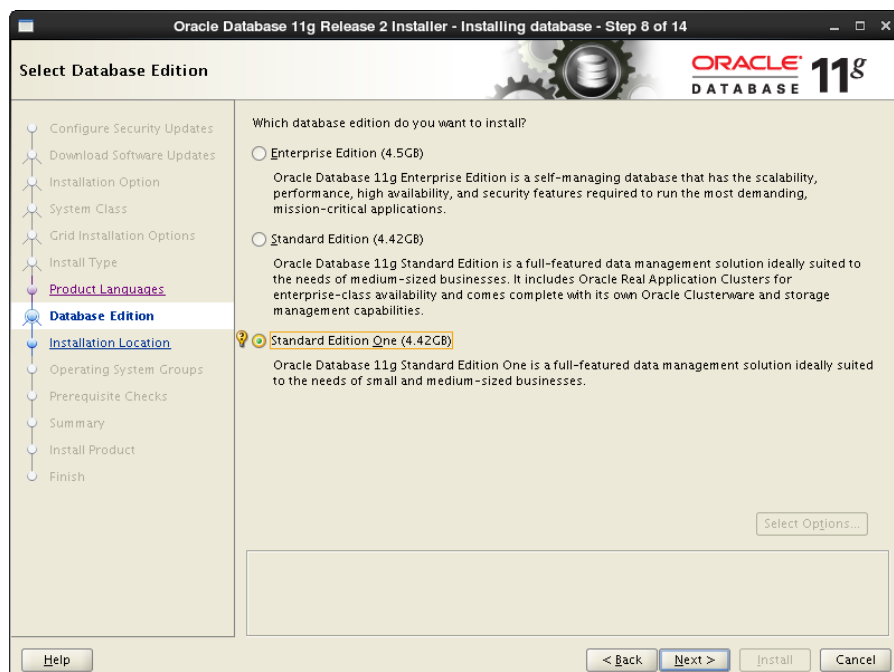


図 4-8 Select Database Edition

13. [Specify Installation Location] 画面で、[Oracle Base] と [Software Location] のディレクトリを確認し、[Next] をクリックします。



図 4-9 Specify Installation Location

14. [Create Inventory] 画面で、[oraInventory Group Name] が [oinstall] であることを確認し、[Next] をクリックします。

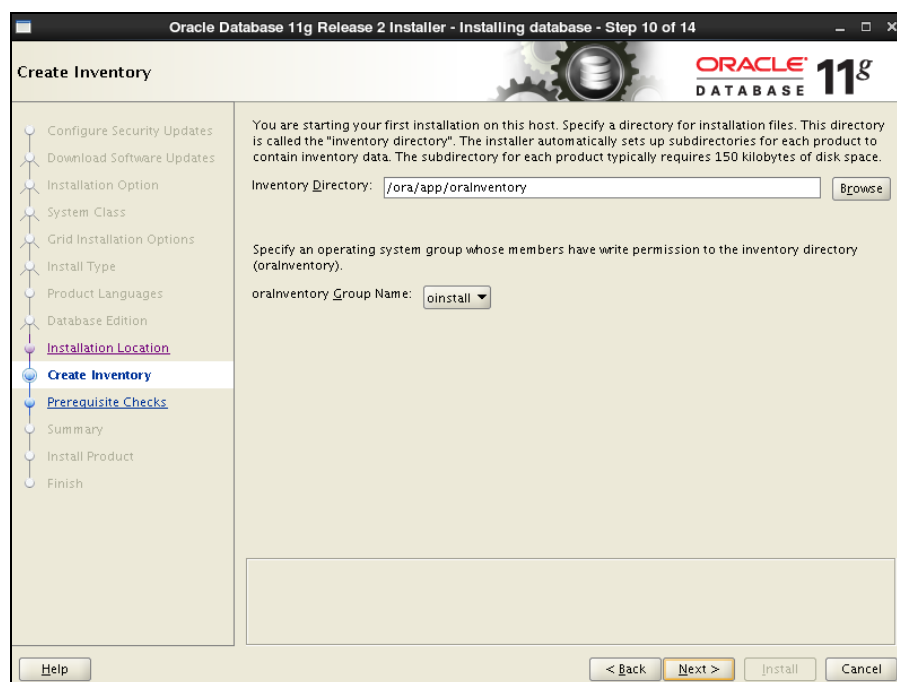


図 4-10 Create Inventory

15. [Select Configuration Type] 画面で、[General Purpose / Transaction Processing] を選択し、[Next] をクリックします。

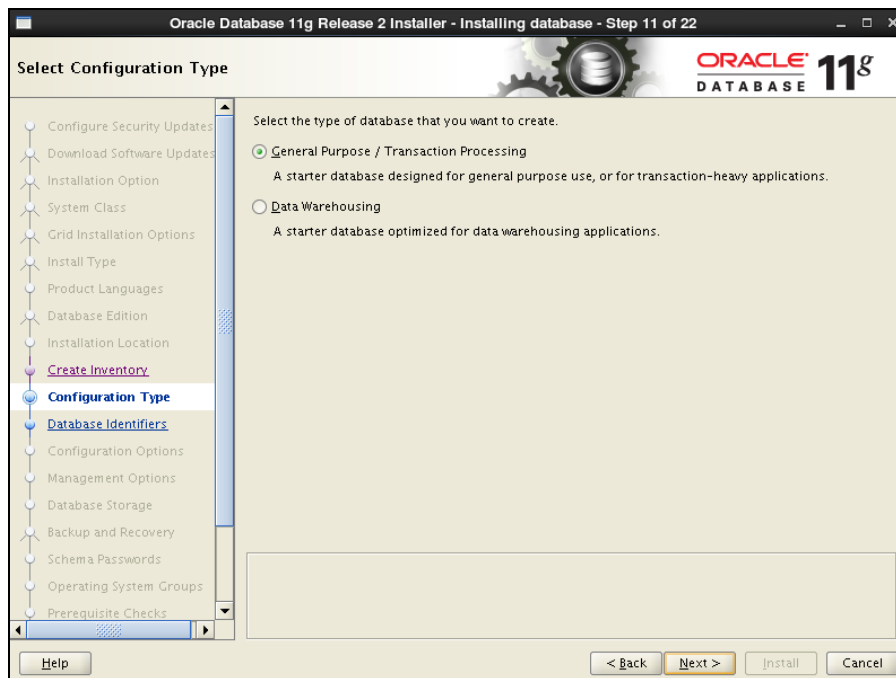


図 4-11 Select Configuration Type

16. [Specify Database Identifiers] 画面で、[Global database name] と [Oracle Service Identifier] が事前に設定した Oracle_SID (例では orcl) と一致していることを確認します。

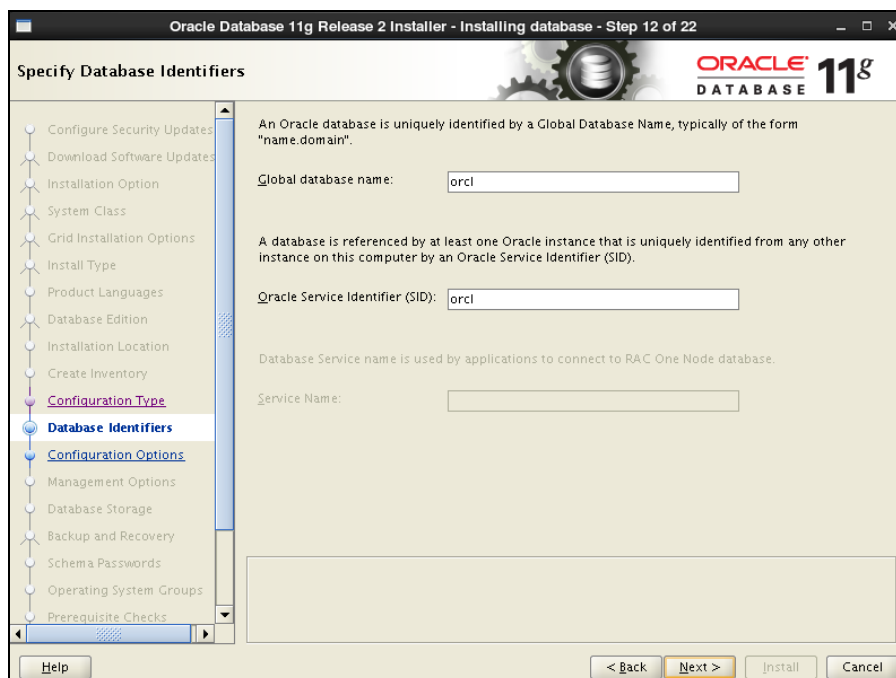


図 4-12 Specify Database Identifiers

17. [Specify Configuration Options] 画面で、各タブの内容を確認し、[Next] をクリックします。

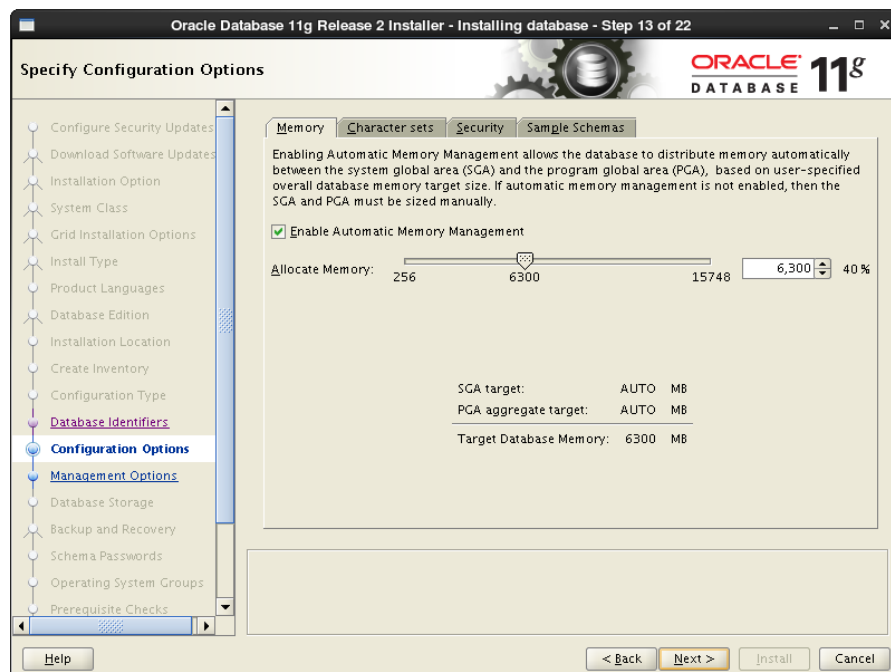


図 4-13 Specify Configuration Options

18. [Specify Management Options] 画面で、[Next] をクリックします。

19. [Specify Database Storage Options] 画面で、[File System] が選択されていることを確認し、[Next] をクリックします。

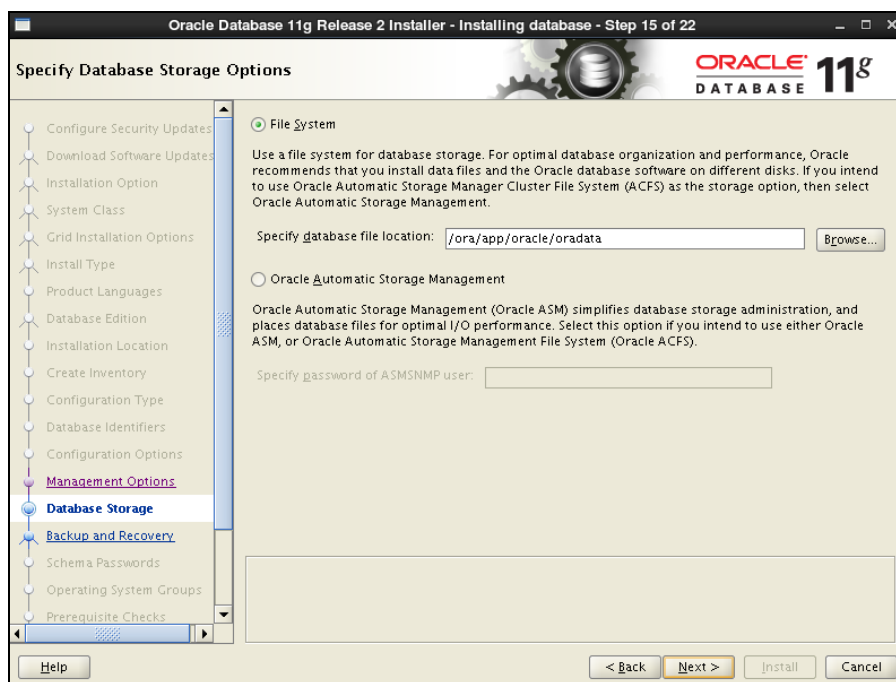


図 4-14 Specify Database Storage Options

20. [Specify Recovery Options] 画面で、[Do not enable automated backups] が選択されていることを確認し、[Next] をクリックします。

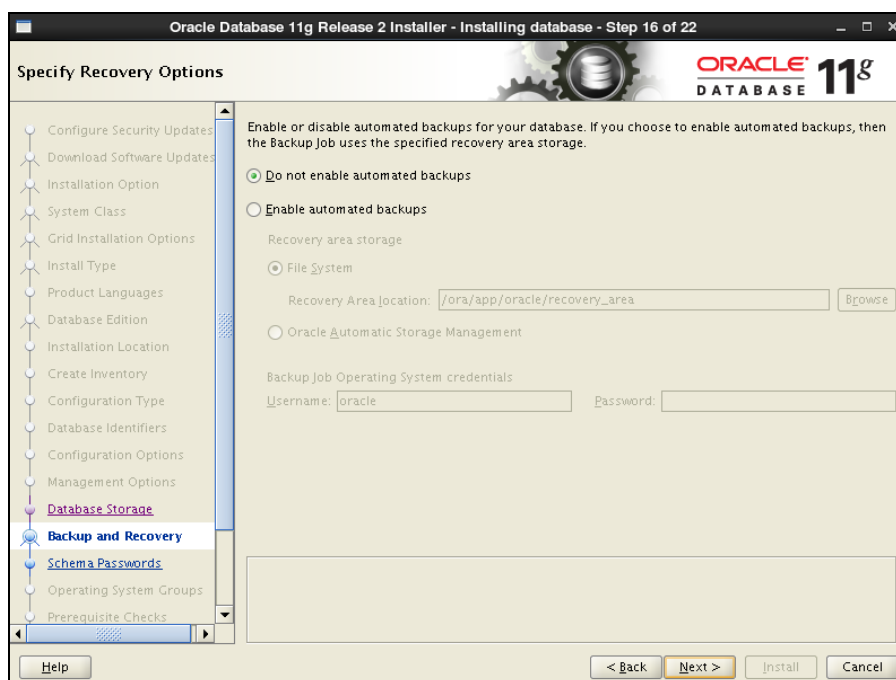


図 4-15 Specify Recovery Options

21. [Specify Schema Passwords] 画面で、必要なパスワードを設定し、[Next] をクリックします。
画面例では [Use different passwords for these accounts] を選択し、各アカウントに異なるパスワードを設定しています。

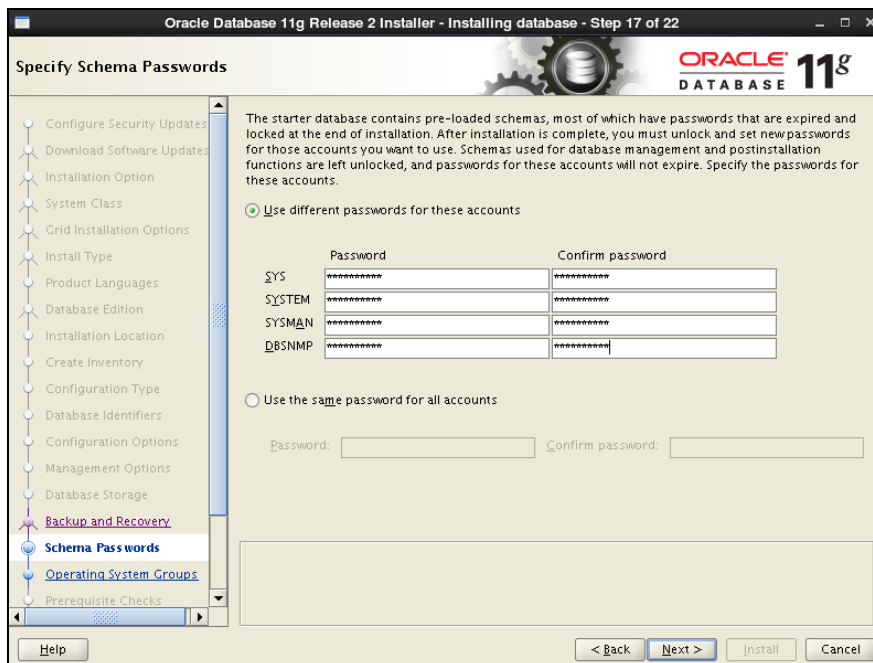


図 4-16 Specify Schema Passwords

22. [Privileged Operating System Groups] 画面で、[Database Administrator (OSDBA) Group] に [dba] が選択されていることを確認し、[Next] をクリックします。

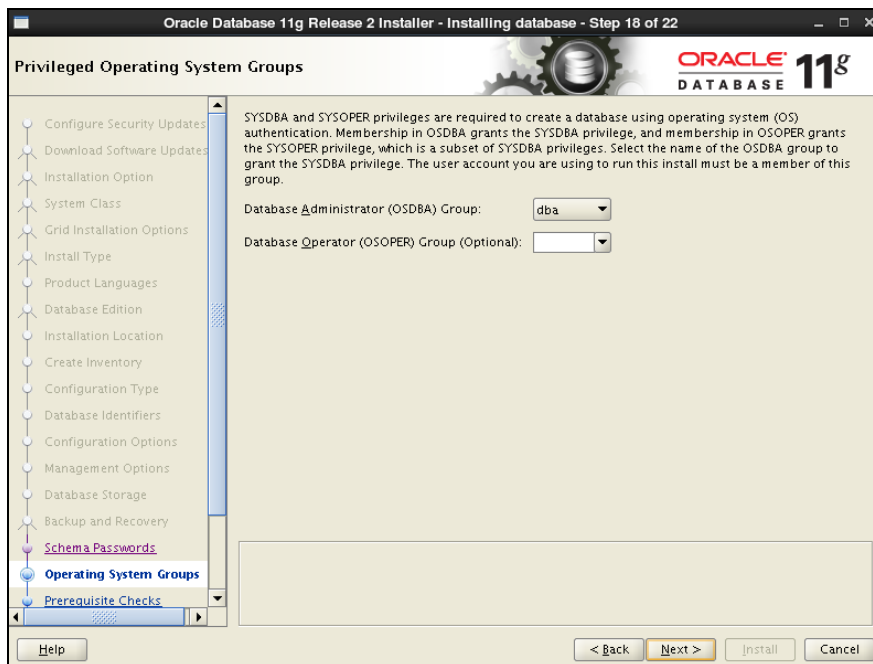


図 4-17 Privileged Operating System Groups

23. 最低システム要件を満たしているかの前提条件チェックが行われ、要件を満たしている場合は [Summary] 画面が表示されます。次の手順に進んでください。

要件を満たしていない場合は、[Perform Prerequisite Checks] 画面に、チェック結果が表示されるので、以下の対処をします。

1. 画面にリストされているチェックの失敗原因を確認し、[Fix & Check Again] をクリックします。
2. 表示される指示に従って修正をします。

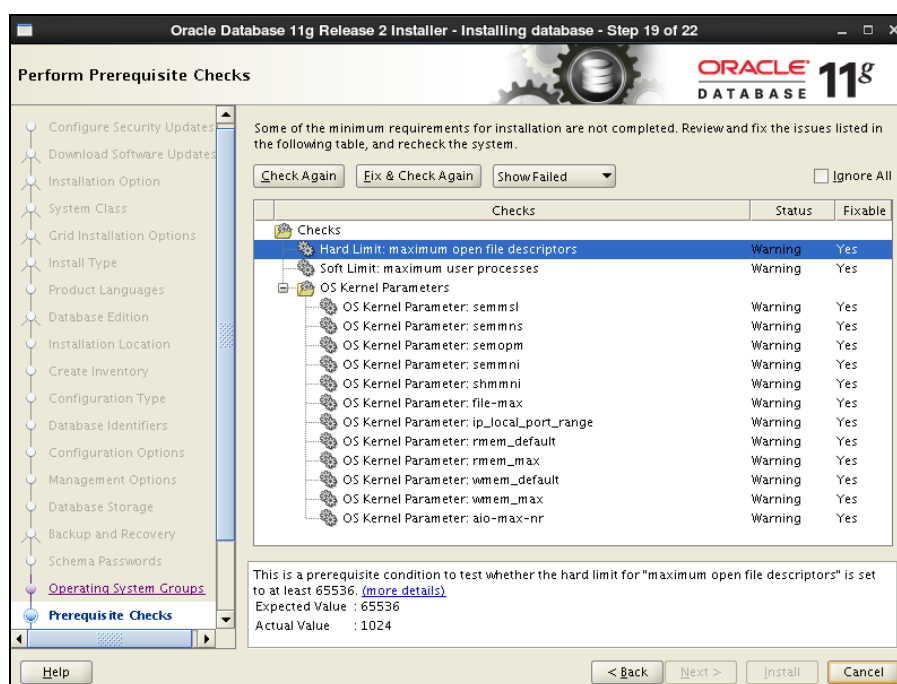


図 4-18 Perform Prerequisite Checks

備考

- `io_local_port_range` は Oracle 社の仕様変更により、設定が不要となりました。
このパラメーターがエラーになった場合のみ、[Ignore All] にチェックを入れてインストールを進めてください。
- root ユーザーとして `runfixup.sh` を実行すると、カーネル・パラメーターのエラーの多くが修正されます。それ以外のエラーについては、表示される詳細情報およびインストールガイドを参照して修正してください。

24. [Summary] 画面で表示された情報を確認し、[Install] をクリックします。
インストールが実行されます。

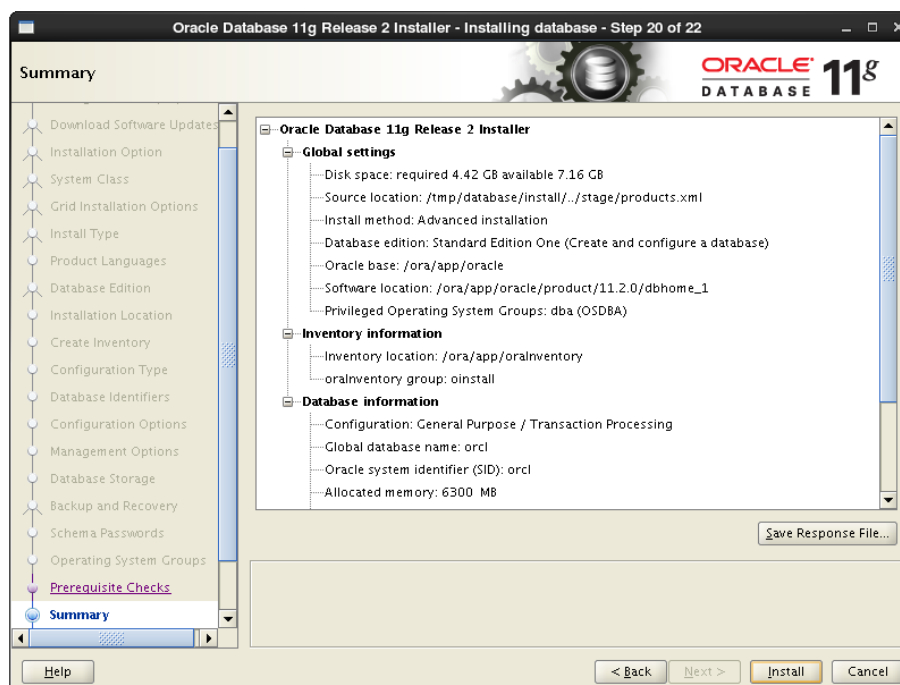


図 4-19 Summary

25. [Database Configuration Assistant] のメッセージ画面が表示されたら、データベースの作成が正常に完了したことを確認し、[OK] をクリックします。

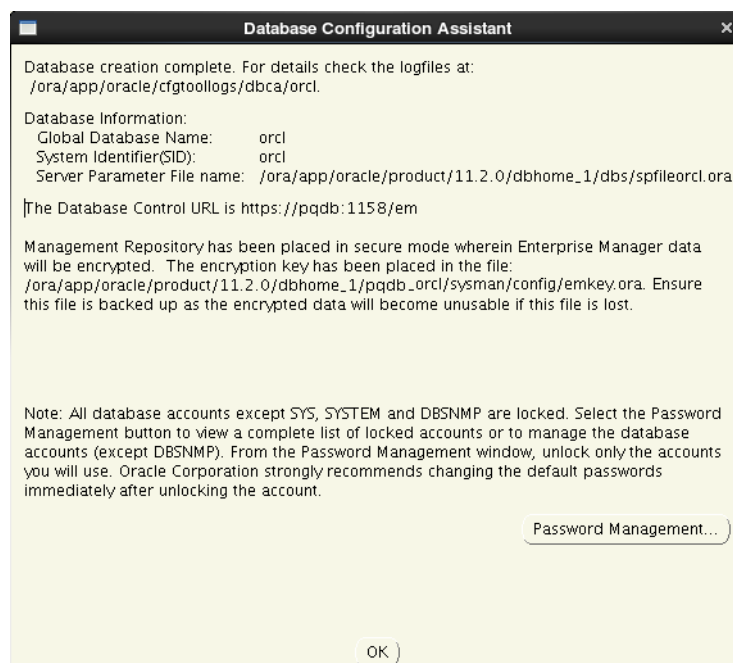


図 4-20 Database Configuration Assistant

26. [Execute Configuration scripts] 画面が表示されたら、root ユーザーとしてスクリプトを実行したあと [OK] をクリックします。

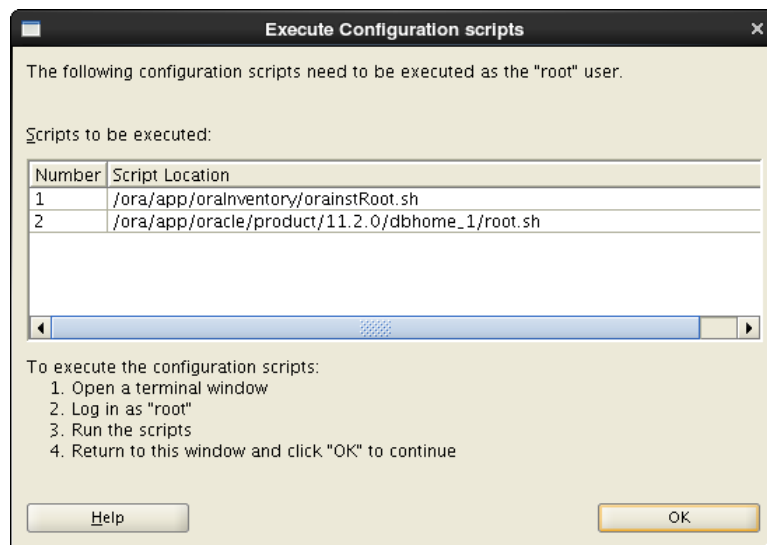


図 4-21 Execute Configuration scripts

27. [Finish] 画面が表示されたら [Close] をクリックします。

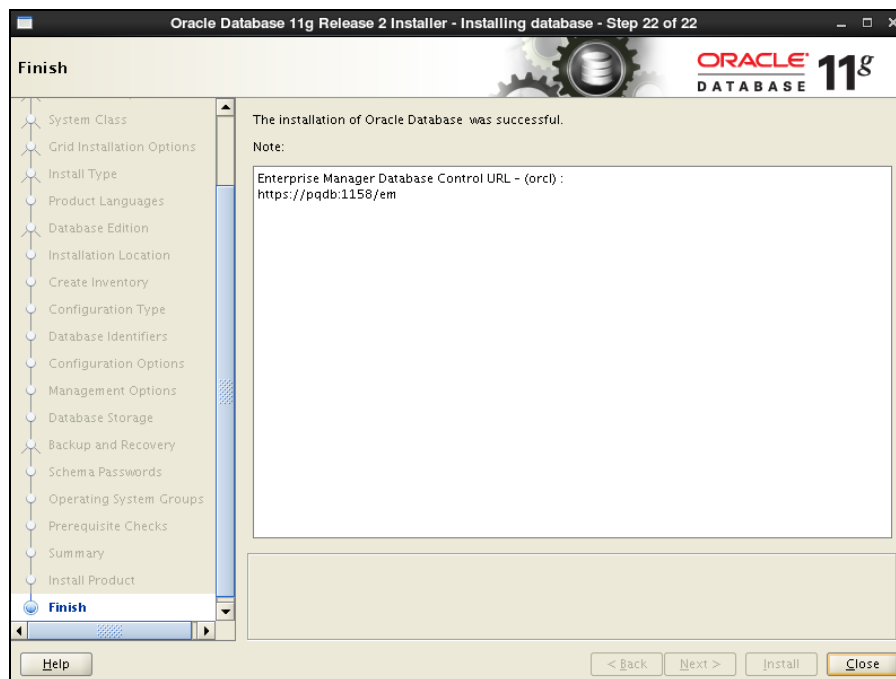


図 4-22 Finish

28. いったん oracle ユーザーからログアウトします。

以上で、Oracle Database のインストールが完了しました。

4.2.4 環境の設定

Oracle Database のインストールが完了したら、システムへ oracle ユーザーとしてログインし、以下の設定をします。

■ 環境変数の指定

1. oracle ユーザーでログイン後、シェル起動ファイルを開きます。

```
$ vi .bash_profile
```

2. 以下の行を入力して環境変数を指定します。

```
ORACLE_SID=orcl
ORACLE_HOME=/ <oracle Database 用ディレクトリ名>/app/oracle/product
/11.2.0/dbhome_1
NLS_LANG=JAPANESE_JAPAN.AL32UTF8
export ORACLE_SID ORACLE_HOME NLS_LANG
PATH=$PATH:$ORACLE_HOME/bin
export PATH
```

3. ファイルを保存し、いったん oracle ユーザーをログアウトします。
4. oracle ユーザーで再度ログインします。

■ utlrp.sql スクリプトの実行

1. 以下のスクリプトを実行し、環境を設定します。

```
$ ./usr/local/bin/oraenv
ORACLE_SID=[orcl]? orcl
```

2. SQL*Plus を起動します。

```
$ sqlplus /nolog
SQL> connect / AS SYSDBA
```

3. utlrp.sql スクリプトを実行します。

```
SQL> @?/rdbms/admin/utlrp.sql
```

4. SQL*Plus を終了します。

```
SQL> exit
```

4.3 Oracle Database Clientのインストール

本書では、Oracle Database Patch Set 11g Release 2 11.2.0.3 for Microsoft Windows (32-bit)を使用し
てインストールしています。

4.3.1 インストールメディアの展開

Oracle Database Client のインストールメディアを、クライアント PC（本書では Windows 7）上
に展開します。

1. 「Oracle Database Patch Set 11g Release 2 11.2.0.3 for Microsoft Windows (32-bit) (Disk 2 of 2)」をクライアントマシンの DVD ドライブにセットします。
2. 「p10404530_112030_WINNT_3of6.zip」を、クライアント PC のローカルディスク上に展開します。

4.3.2 Oracle Database Clientのインストール

クライアント PC に Oracle Database Client をインストールします。

1. setup.exe を実行します。
2. [インストール・タイプの選択] 画面で、[ランタイム]を選択し、[次へ]をクリックします。

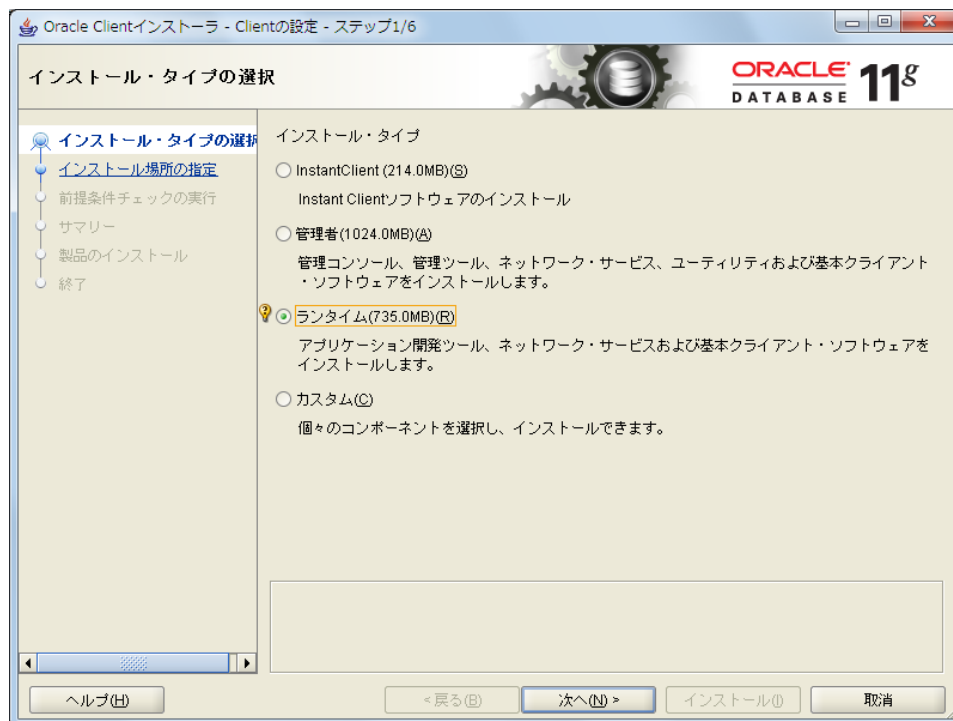


図 4-23 インストール・タイプの選択

3. [Software Update のダウンロード] 画面で、[ソフトウェア更新のスキップ] を選択し、[次へ] をクリックします。



図 4-24 Software Update のダウンロード

4. [製品言語の選択] 画面で、日本語と英語が選択されていることを確認し、[次へ] をクリックします。



図 4-25 製品言語の選択

5. [インストール場所の指定] 画面で、[ソフトウェアの場所] をデフォルト値のままにするか、Oracle コンポーネントをインストールするディレクトリのパスを入力します。

[次へ] をクリックします。

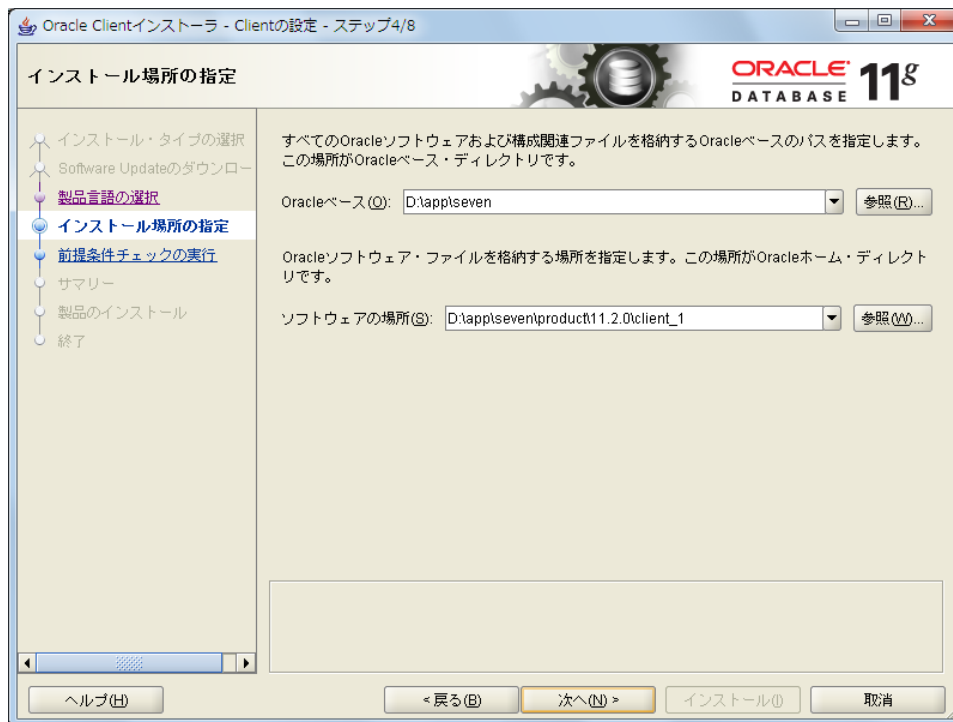


図 4-26 インストール場所の指定

6. 最低システム要件を満たしているかどうかのチェックが行われ、要件を満たしている場合は [サマリー] 画面が表示されます。次の手順に進んでください。

要件を満たしていない場合は、チェックした結果が表示されるので、以下の対処をします。

1. 画面にリストされているチェックの失敗原因を確認し、[修正および再チェック] をクリックします。
2. 表示される指示に従って修正します。

7. [サマリー] 画面で表示された情報を確認し、[インストール] をクリックします。

インストールが開始されます。

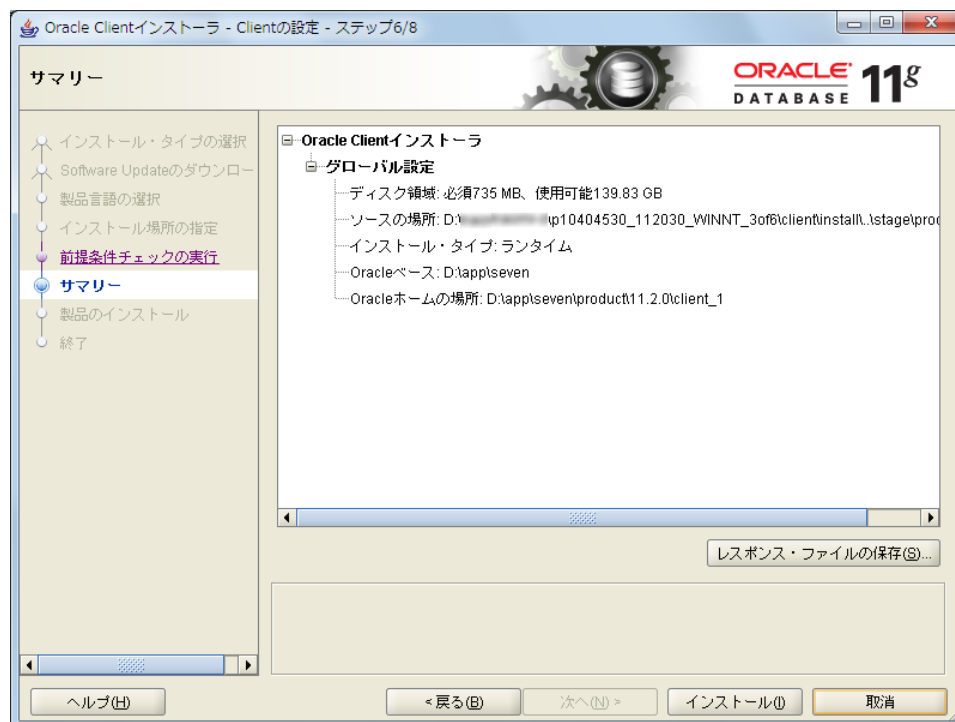


図 4-27 サマリー

8. インストールが完了し、[終了] 画面が表示されたら、[閉じる] をクリックします。



図 4-28 終了

4.3.3 ローカル・ネット・サービス名の構成

クライアント PC で Net Configuration Assistant を起動し、データベースのサービス名を構成します。

1. [すべてのプログラム] – [Oracle-＜HOME 名＞] をクリックします。
2. [コンフィグレーションおよび移行ツール] – [Net Configuration Assistant] をクリックします。
Oracle Net Configuration Assistant が起動します。
3. [ようこそ] 画面で、[ネーミング・メソッド構成] を選択し、[次へ] をクリックします。



図 4-29 ようこそ

4. [ネーミング・メソッドの構成-メソッドの選択] 画面で、[ローカル・ネーミング] が [選択済メソッド] に入っていることを確認し、[次へ] をクリックします。

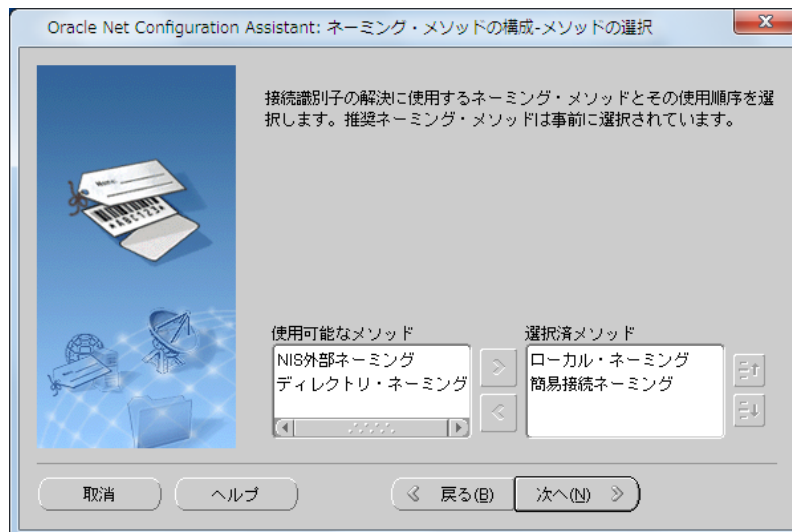


図 4-30 ネーミング・メソッドの構成-メソッドの選択

5. [ネーミング・メソッドの構成が終了しました] 画面で、[次へ] をクリックします。

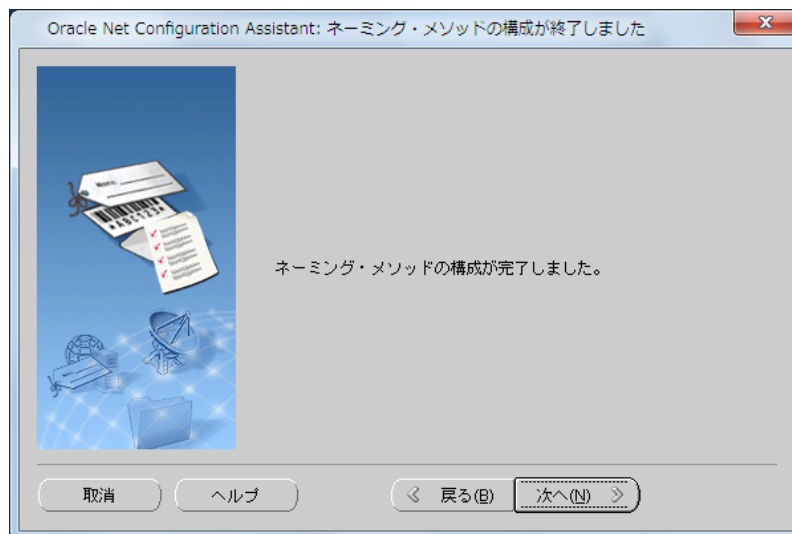


図 4-31 ネーミング・メソッドの構成が終了しました

6. [ようこそ] 画面が再び表示されたら、[ローカル・ネット・サービス名構成] を選択し、[次へ] をクリックします。

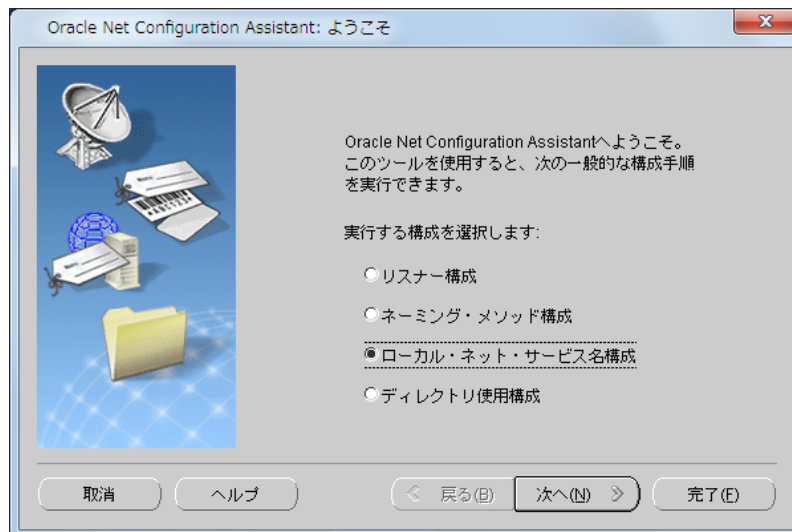


図 4-32 ようこそ (2 回目)

7. [ネット・サービス名の構成] 画面で、[追加] を選択し、[次へ] をクリックします。

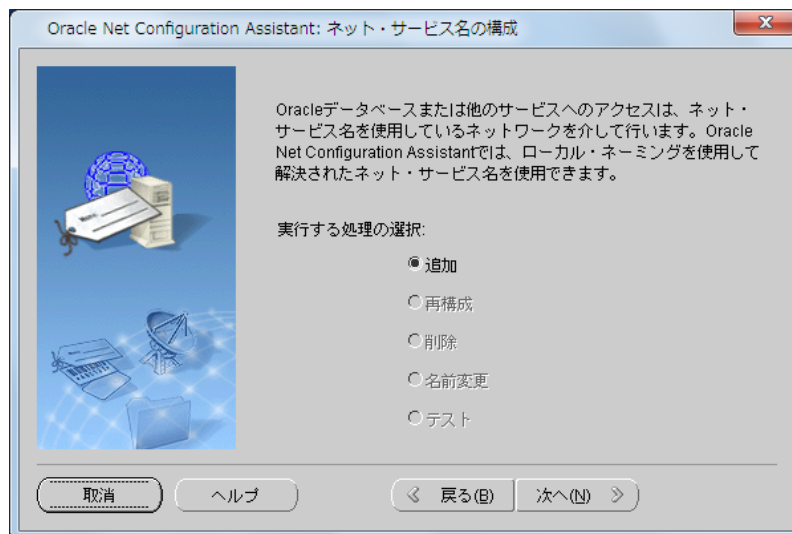


図 4-33 ネット・サービス名の構成

8. [ネット・サービス名の構成-サービス名] 画面で、接続するデータベースのサービス名 (例では、作成したデータベースのグローバル・データベース名「orcl」) を入力し、[次へ] をクリックします。

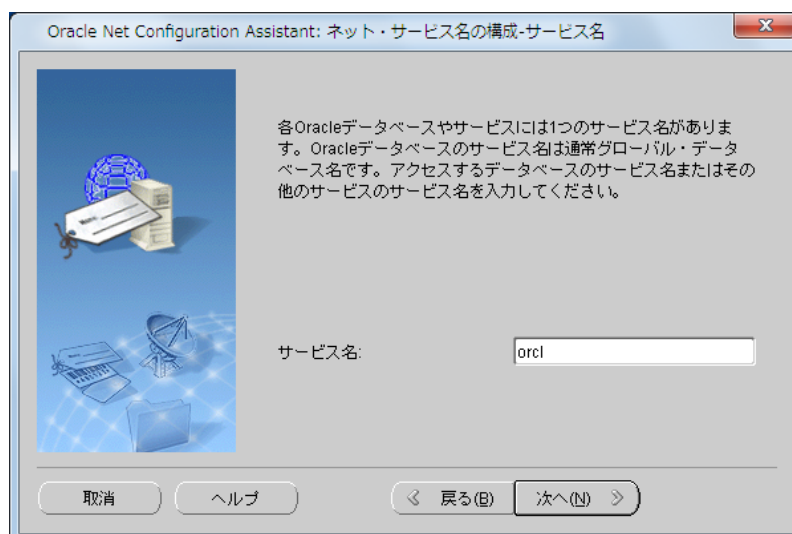


図 4-34 ネット・サービス名の構成-サービス名

9. [ネット・サービス名の構成-プロトコルの選択] 画面で、データベースへの接続に使用するプロトコル (例では「TCP」) を選択し、[次へ] をクリックします。

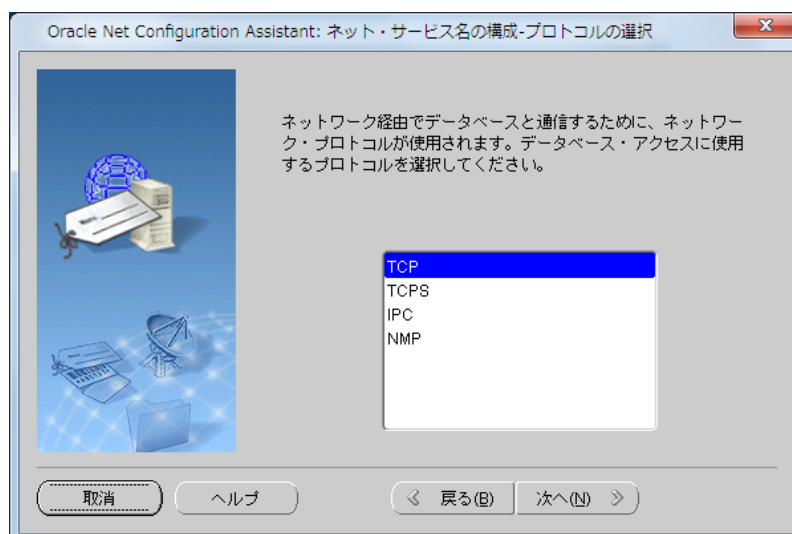


図 4-35 ネット・サービス名の構成-プロトコルの選択

10. [ネット・サービス名の構成-TCP/IP プロトコル] 画面で、接続するデータベースがあるサーバのホスト名と使用するポート番号を設定し、[次へ] をクリックします。

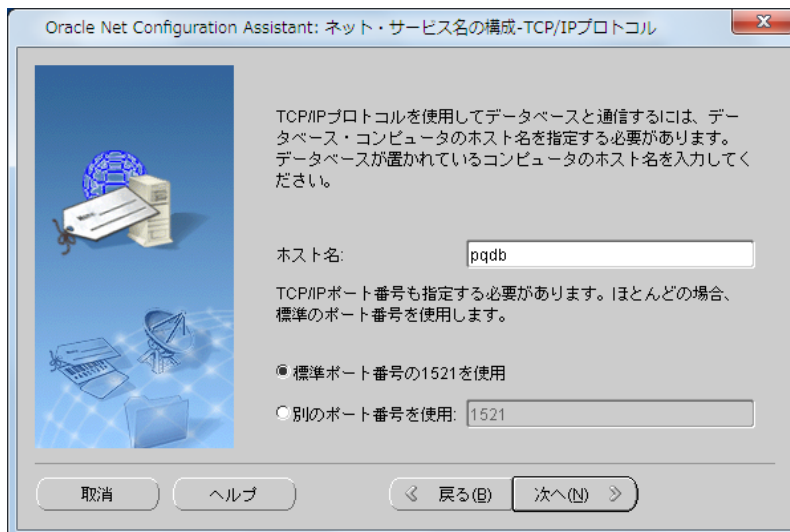


図 4-36 ネット・サービス名の構成-TCP/IP プロトコル

11. [ネット・サービス名の構成-テスト] 画面で、[はい。テストを実行します。]を選択し、[次へ] をクリックします。

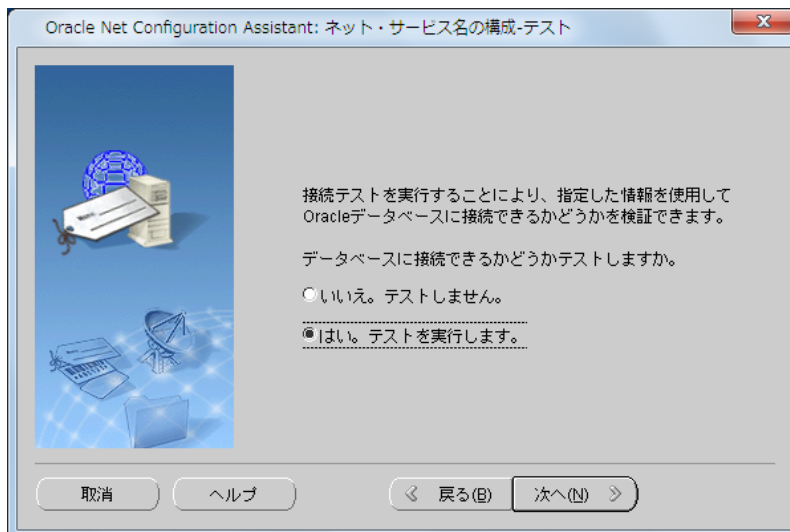


図 4-37 ネット・サービス名の構成-テスト

12. [ネット・サービス名の構成-接続] 画面で、テストに成功したことを確認し、[次へ] をクリックします。

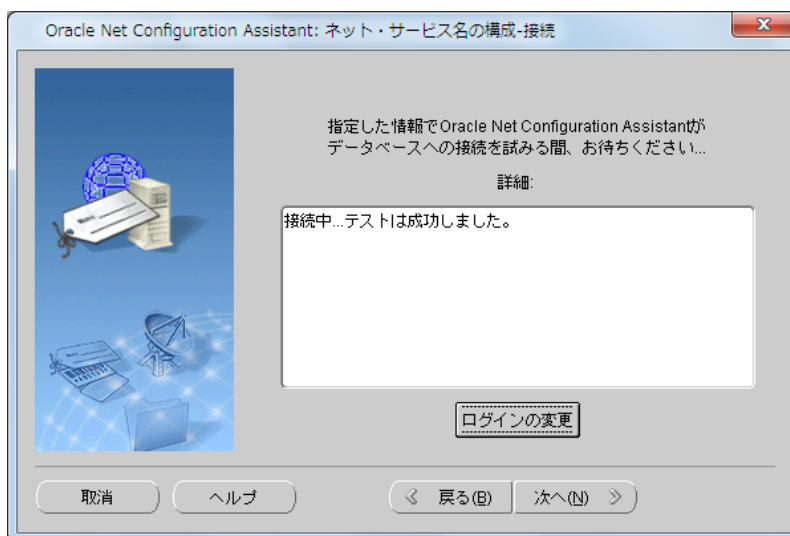


図 4-38 ネット・サービス名の構成-接続

備考

テストに失敗した場合は、以下のいずれかまたは両方の操作をして、再度テストを実行してください。

- [ログインの変更] をクリックし、ユーザー名とパスワードを修正する
- [戻る] をクリックし、データベースのサービス名などを修正する

13. [ネット・サービス名の構成-ネット・サービス名] 画面で、使用するネット・サービス名を入力し、[次へ] をクリックします。

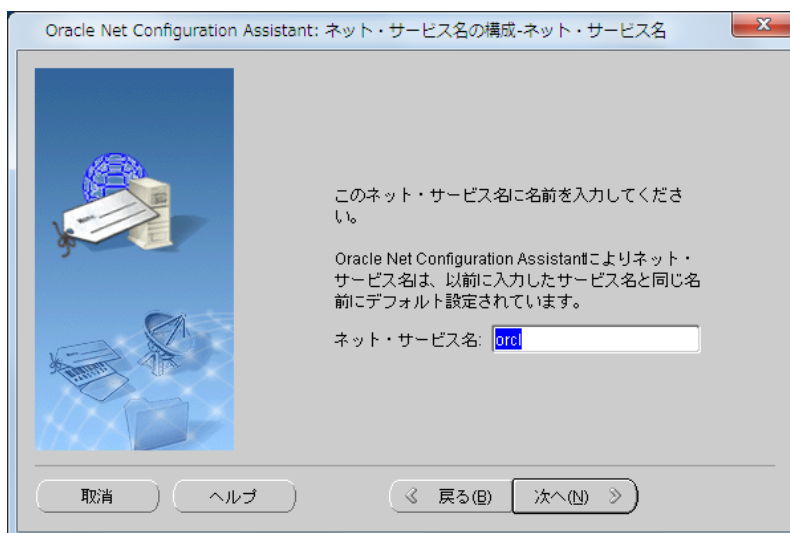


図 4-39 ネット・サービス名の構成-ネット・サービス名

14. [ネット・サービス名の構成-別のネット・サービス名] 画面で、設定を完了する場合は [いいえ] を選択し、[次へ] をクリックします。

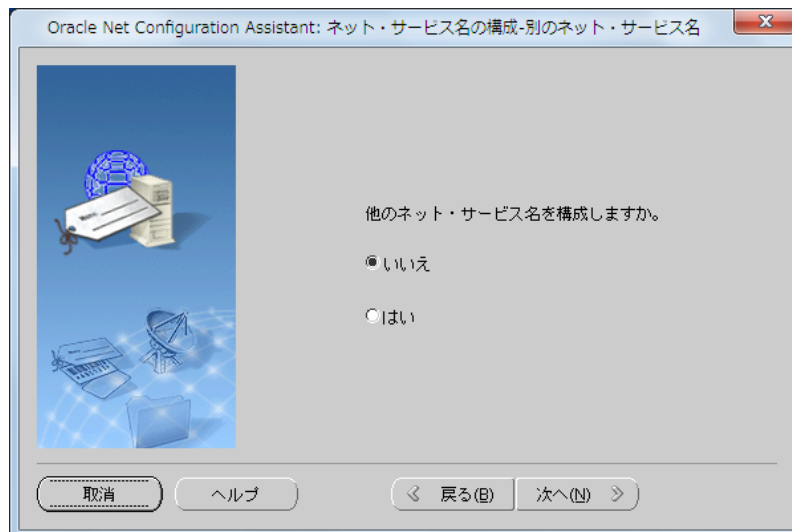


図 4-40 ネット・サービス名の構成-別のネット・サービス名

15. [ネット・サービス名の構成が終了しました] 画面で、[次へ] をクリックします。

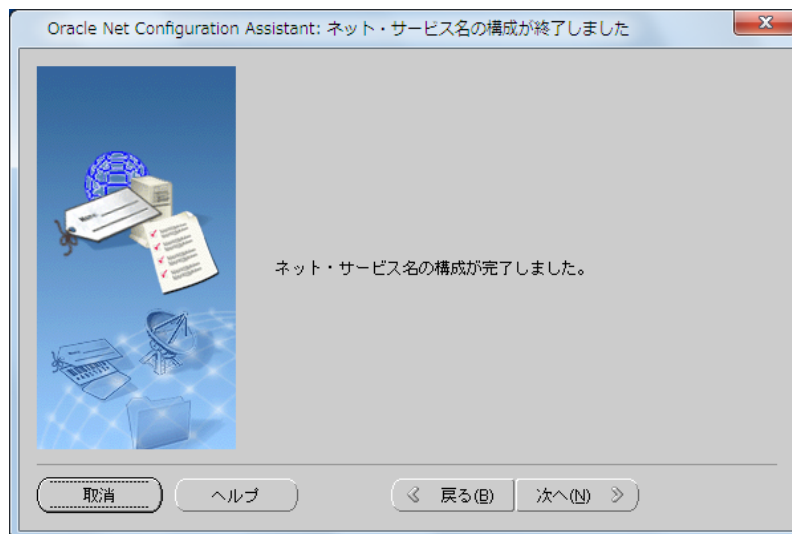


図 4-41 ネット・サービス名の構成が終了しました

16. [ようこそ] 画面で、[完了] をクリックします。



図 4-42 ようこそ（完了時）

5 データベースの利用開始

5.1 Oracle Enterprise Manager Database Controlへのログイン

1. Web ブラウザに以下のアドレスを入力し、Oracle Enterprise Manager Database Control へログインします。

https:// <ホスト名>:1158/em

2. ユーザー名 [SYS]、インストール時に設定したパスワードを入力し、[ログイン] をクリックします。

[SYS] としてログインする場合は、接続モードを [SYSDBA] にします。

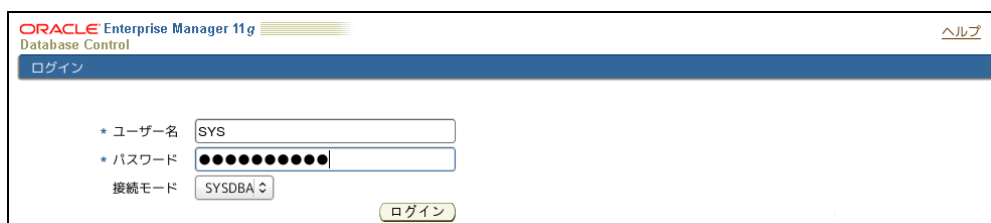


図 5-1 ログイン

3. Oracle Enterprise Manager Database Control のトップページが表示されます。



図 5-2 Oracle Enterprise Manager Database Control トップページ

5.2 ユーザー・アカウントの作成

1. Oracle Enterprise Manager Database Control にユーザーを管理する権限を持つユーザー・アカウント (SYS または SYSTEM) でログインします。
2. ページ上部の [サーバー] をクリックし、サーバー・サブページを表示します。
3. [セキュリティ] セクションで [ユーザー] をクリックします。
4. [作成] をクリックします。
[ユーザーの作成] の一般サブページが表示されます。



図 5-3 ユーザーの作成

5. 必要項目を入力し、[OK] をクリックします。
ユーザー名と同じ名前でスキーマが自動作成されます。

5.3 SQL*Plusを使用したOracle Databaseへのアクセス

SQL*Plus をインストールしたクライアント PC から、以下のコマンドを入力してログインします。

```
$ sqlplus <ユーザー名>/<パスワード>@<データベース名>  
(例) sqlplus user/pwd@orcl
```

改版履歴

版数	日付	変更箇所（注）	変更内容
01	2012-02-07	—	—
02	2012-07-10	全体	RHEL6.2、Oracle DB 11.2.0.3 対応

使用条件

著作権・商標権・その他の知的財産権について

コンテンツ（文書・画像・音声等）は、著作権・商標権・その他の知的財産権で保護されています。
本コンテンツは、個人的に使用する範囲でプリントアウトまたはダウンロードできます。ただし、
これ以外の利用（ご自分のページへの再利用や他のサーバへのアップロード等）については、当社
または権利者の許諾が必要となります。

保証の制限

本コンテンツについて、当社は、その正確性、商品性、ご利用目的への適合性等に関して保証する
ものではなく、そのご利用により生じた損害について、当社は法律上のいかなる責任も負いかねま
す。本コンテンツは、予告なく変更・廃止されることがあります。

不明な点は、「本製品のお問い合わせ」(<http://jp.fujitsu.com/platform/server/primequest/contact/>)
よりお尋ねください。

無断転載を禁じます。

C122-A012-02

2012.07